

百合団地シリーズ（仮）

雨泉洋悠

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

オリジナルの百合小説です。
百合の丘団地の物語

目次

百合団地シリーズ(仮)	Vol. 00	1
無音の接続詩		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 01	7
雨色の宮		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 02	15
雛結び		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 03	25
水踊姫		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 04	30
桃色少女		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 05	38
桜探し		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 06	44
金の華く前編く		
百合団地シリーズ(仮)	Vol. 07	47
金の華く後編く		

百合団地シリーズ（仮） Vol. 00
無音の接続詩

— 4分33秒

私は月を見ていた。

今日の月は満月。教室の窓側の一番前の席にある、私の席からは窓の向こうの月が良く見える。

さつきまでは、まだ夕陽の持つオレンジ色と、青から藍へ変わろうとする空の中にあつて、朧気な白い光を纏っていた月。

今は一面の黒の中に疎らに散る無数の光の中でも、一番の輝きをもたらず金の光を放っている。

— 4分00秒

私は、ただ無表情に私を見つめ返すだけの月から、気まぐれに目を逸らす。

教室の中央にある、無為に一つの音を奏で続ける真円に向き合う。

二つの針は、重なり合って私の方に向いていた。

帰ろう。

私は心の中だけで呟いて、席を立った。

数度、乾いた音を教室に響かせた後、一度だけ、夜の支配者に向き直る。

黄金の姫君は、何も語らずに、ただ静かに佇む。

— 2分00秒

規則正しく並ぶ光の中を、乾いた音のみを響かせて進む。一つ歩を進める毎に、光と影は歪に乱れる。私の前に生きるものの姿は無く、私の後ろにもまた、生きるものの姿は無い。

音を放つものもまた、前にも後ろにも他になく、ただここにいる私一人。

昼間であれば、学校内で一番陽当たりの良い中央ホールに近づく。そこに行けば今宵を支配する姫君もより大きさを増すかも知れ

ない。

もちろん、今も視線を少し右に移すなら、姫君はそこに居る訳だ
けど。

―0分13秒

姫君のもたらず光の勢いが、僅かながら弱まった気がした。

―0分06秒

中央ホールへの、最後の一步二歩の音が響くか響かないかの刹那、
微かな衣擦れの音と、静かな深呼吸の音を聞いた。

0分00秒

中央ホールに足を踏み入れ、視線を右に移した瞬間、常設されてい
るピアノが、その黒と白の鍵をあらわにした。

再び、微かな衣擦れの音と呼吸の音を聞いた。

0分06秒

微かになっていた姫君の光が、その強さを再び増した。

0分13秒

ピアノの前に座る何者かの姿が、徐々に姫君の光に照らされてい
く。十字架に刻まれて射し込む姫君の光に照らされて、その腰まで伸
びた金の髪が輝く。

その瞬間、今宵を支配していた姫君は、哀れにもその地位を奪わ
れた。

従者となった月光を従えて、その人は静かに瞼を閉じていた。重
ねられた両手は、制服のスカートの上に静かに置かれていた。その横
顔は、まるで西洋人形のようにでいて、しかし確かな生命の暖かみを備
えていた。

私は、自らの素直で本能的な欲求に突き動かされ、姫君の元へと
歩を進めた。

先程よりも控えめな靴音と、スカートのプリーツが擦れ合う衣擦れ
の音と共に、私は少しずつ、その静寂の姫君が支配する空間に忍び
入った。

2分00秒

姫君は、ただただ静寂の中にいた。

私が後数歩でピアノの横に立てる位置まで来ても、構うことなく自らの内面に広がっているであろう、無音空間に浸っていた。

既に私の存在には気付いているだろうと思う。

今この空間に流れる音は、互いの僅かな呼吸音だけ。

私は彼女の生命の音を感じながら、その月光に照らされた横顔と、近づくことで良く見えるようになった、その細くてしなやかな色素の薄い手の甲と、制服のスカートの裾から覗く、こちらもまた細さと色の白さを月光によって強調された、ふくらはぎの辺りを交互に見つめ続けた。

4分33秒

どれだけの時間をそうしていたのだろう。

永遠に続くように感じられたその至福の時間にも、終わりの時は訪れる。

姫君は瞼を閉じたまま、鍵盤を再びの暗闇に戻すと、こちらを向いて瞼を開いた。

「どうでしたか？」

笑顔で彼女は私にそう尋ねた。初めて見る彼女の瞳の色は、どこまでも深い、静けさを湛えた碧色だった。

「とても、素敵でした」

私は素直にそう答えてしまった。何か演奏を聴いた訳でもないのに。

私は間違えた、と思ったものの。

「そうですね、素敵でした。月の音と、私の音と、そして貴女の音。今日はとても良い演奏が出来ました」

と、笑顔のまま彼女が言ったので、私の返答は間違っていないなかったようだ。

「今の演奏ではピアノは弾いてなかったみたいですけど…：どういう曲ですか？」

私は一番疑問に感じたことを素直に聞いてみた。

「今の曲は『4分33秒』ジョン・ケージ作曲です。楽譜は無音。この空間に響いた全ての音、この空間全てがこの曲の演奏なんです」

そんな曲もあるんだな、と私は思った。そして、この人になんて似合っている曲だろうと思った。

この演奏をしている時の、この人の全て、この人を取り巻く全てが音楽になっている。

「私は、音無月乃。音が無いって書いて、月に乃木大将の乃。見た目はこんなでハーフだけど日本生まれの日本育ち。貴女のお名前、聞かせて頂いても良いかしら？」

彼女の自己紹介を聞き、私は納得する。

「私は、月島陽子です。月の島に、太陽の陽に子供の子です。私も日本生まれの日本育ち、純粋な日本人です」

私は彼女の自己紹介を受けて、そう答えた。

「それは見れば解るよ、綺麗な長い黒髪に、吸い込まれるような黒色の瞳。どこから見ても和の雰囲気か素敵だね。一人とも月の字が入ってるなんて奇遇だね」

そんな風に褒めてもらった。ちよつと照れて、私は思わず右手で頭を掻いた。

「よろしくね、陽子」

そう言っつて、月乃さんが差し出した左手に、私も左手で握手した。

「よろしく、月乃さん」

思わずさん付けにしたら、やっぱり突っ込まれた。

「さんは要らないよ」

「いや、さん付けの方が慣れてるので。私の事は呼び捨てで大丈夫です」

思わずそんな言い訳をした。どうにもさんを付けないで呼ぶことに抵抗があったのだ。

「そっか、了解。陽子がそれが良いならそれで行こう。取り敢えず、もう遅いし帰ろう」

月乃さんは、そう言っつてペンダントにしているピアノの鍵で鍵をかけ、脇に置いていた自分の鞆を持って、私の左手を引いて歩き出した。

月光は、少しその勢いを弱め、私達二人を静かに照らしていた。

∞分∞秒

昇降口では、月乃さんが三年生である事が解った。私は二年生、さん付けで正解だった訳だ。

校門の警備員さんの所で、ちよつとだけ事情を聞かれた。二人とも微妙に違うけど、適当に部活が長引いたと伝えておいた。

学校と、私達の住む団地との間のクロス歩道橋に差し掛かる。

「陽子は何号棟？ 私は4号棟、ちなみに、実を言うところないだ引つ越してきたばかりの転校生です」

クロス歩道橋の中央、街頭の灯りに月乃さんの笑顔が映える。私は多少ボーツと見蕩れながら、答える。

「33号棟です」

「じゃあ、左だね。私は右。おお、また奇遇だね。4号棟と33号棟、二人で4分33秒！」

そう言つて、月乃さんはクロス歩道橋の真ん中でクルクル廻つた。

フワフワと跳ね回る金色の長い髪が街灯の光に照らされてキラキラと輝いていた。

街頭の更には、今夜の主役を月乃さんに奪われた満月。私は思わず、

「月が綺麗ですね」

と、月乃さんを見つめながら呟いた。ピタツと、月乃さんが止まり、マジマジと私を見つめる。瞬間、私の方に走つてきて、顔と顔を近づけて囁く。

「本気にしちゃうよ？」

そう言つて、ニーツと今日一番の満面の笑みを浮かべると、反転翻つて右の通路へ走り出す。

「じゃあね、また明日」

言いながら手を振る姿が、通路を走りぬけ階段を降り、闇の中を4号棟の方に消えていった。

私はその場にへたり込み呟いた。

「…キス、されるかと思つた」

今夜の主役の月は消えて、主役を奪われた月だけが残つた。

ただ光をもたらすだけになったその月は、月乃さんには適わない

までも、やはり綺麗だなど思った。

ただ、その時には私は月乃さんの言葉の意味を良く解っていないかった。私が無意識に漏らした言葉が、その言葉通りではない特別な意味を含んでいる言葉だと言うことを知るのは、もう少し後の事だった。

終

雨色の宮

私はこの日を待っていた。あの人に会ってから、初めて迎えるこの日。私達にとつて、超重要な運命の分かれ道。

今日は朝から、灰色の空が私達を見つめている。でも、空模様が余り良くない状況であっても、私にはそれほど関係無かった。

天の神の気まぐれに心を揺らされるほど、今日の私達は天の神を気にしていない。

今日の日付、2月14日。

この学び舎に集う子兎の群れの殆ど全てが、少なくとも今日だけは天の神ではなく、それぞれの地の神のみを心に留めている。

普段は真面目に本分を全うしているこの部屋の昼の住人達からも、今日に限っては落ち着き無さと、浮き足立つ心持ちを嫌でも感じ取れる。

私の斜め前に立つ、この部屋の導き手も、この空間に満ちる空気を感じ取っているようだ。

左に視線を向ければ、未だ灰色の空はその滴を落とすことなく持ち堪えている。

「今日は聖ウアレントリーヌス殉教の日。皆さんが一刻も早いホームルームの終わりを望んでいるのは私も理解しているので、今日はこれで終わりにしましょう」

子兎達から感謝の思いを含んだ黄色い歓声が上がる。私達の導き手は歳が近いからか、とても話が分かる。私も心の中で静かに感謝した。

「陽子ちゃん、また明日ね。はいコレ」

「さよーならー、私も」

「陽子ちゃん、あげる」

「陽子さん…私からも…」

教室を出て行くこうとする私を、何人かの仲の良いクラスメイトが笑

顔で送り出してくれる。それぞれ可愛らしい包みをくれたので、もちろん私も笑顔でお返しを渡す。

「ありがとうみんな。また明日」

彼女達もまた意中の相手との逢瀬が待っているのだろう。その背中を押したい、応援したい気持ちでいっぱいだ。

先ほどもらった包みを確認しつつ、鞆に入れつつ足早にいつもの場所に向かう。

一つ妙に目立つ包みがあった。あの娘は手先がとても器用だから、似たような包みでも見栄えが多少違う。私好みの色使いで、私は少し嬉しくなった。

道すがらでも、顔見知りの子達から幾つか受け取った。その都度多めに用意しておいたお返しを渡す。

みんな私にも用意してくれるなんてとてもありがたい。みんなの意中の相手との幸せを心から祈っておいた。

いつもの中央ホールに辿り着くと、まだ月乃さんは来ていなかった。月乃さんのピアノも今日は閉じられている。

何人かの生徒がいて、可愛らしい包みの受け渡しをしている。ついでに私にくれる子も何人かいた。上級生もいたような気がする。お返しを渡しつつ、何とも恐れ多かったり、ありがたい気分になったりした。

ピアノの後ろにある十字架に切り取られた空は、まだ灰色の空。堪えきれなくなったようで、十字架は徐々に滴に濡らされて来ていた。

何となく、校内を月乃さんを探して歩いてみることにした。

中央ホールを最上階の中心とした中央棟内で、月乃さんがいそうな所と言えば…音楽室・図書室・美術室辺りかな…。

考えながら階段を降りる。まずは音楽室だ。

「月乃く？今日はこっちは来てないよ。空振りだね」

月乃さんはたまに合唱部の伴奏を頼まれたりしている。学校のオーケストラにも所属しているので、本命だったのだけど合唱部の部長さんの言う通り、空振りだった。

「月乃さんなら今日は来てないですよ」

美術室も空振り、美術部には月乃さんのお友達が多い。この副部長さんもそうだ。

「今日は本は借りに来てないわ、まだ教室にいるかもよ。私が出る時は少なくともまだいたわ」

月乃さんのクラスの図書委員の方だ。その言葉に従って、私達の棟とは中央棟を挟んで反対の、上級生の教室がある棟に向かう。

「音無さんならちよつと前に教室を出たわよ。どこに行くかは聞いてないわねえ…ごめんなさいね」

月乃さんのお友達の方だ。結構仲が良いみたいだけど今日の行方は知らないみたい。

その後、中央棟も上級生棟を一通り回ってみたものの、私の包みが可愛らしい包みと交換されるばかりで、交換出来なくなった後は増えていくばかりだった。来月は全員にお返しを考えないと。

私の大荷物に見兼ねたのか、手芸部の知り合いの女の子が可愛らしい手提げ袋もくれたのでそれに丁寧に詰め込んで持ち歩いた。

手提げ袋のお礼も考えておこう。

窓の外を見ると、弱めではあるものの、先程よりは滴の勢いが増しているような気がした。私はふと、HRの最後に先生が言っていたことを思い出した。

聖ウアレントリーヌス：月乃さんの事だからもしかしてあそこにいるのかも。

今回は空振りではなく安打を打てるような気がした、もしくは本塁打。

その場所は中央棟後方の中庭にある。白い十字架を戴いた純白の結晶。外壁だけでなく、扉も内装も白に包まれた、白色の聖なる宮。

その主もまた、あの場所と同じくあの人なのだ。

私は差していた青色の傘を扉の脇の傘立てに置くと、静かに扉を開けた。漏れ聞こえてきた音によって、そこに私の意中の相手がいることが私には解った。

今回は空振り三振とはならず、見事に本塁打を打つことが出来た

のだ。

その空間は、前方左側に据え付けられたパイプオルガンから奏でられる響きに満ちていた。

この曲は前にも月乃さんに聴かせてもらったことがある。

音楽の父が作曲したという、名も無き音楽。音楽の父が残した数多くの曲の中でも、この曲が一番好きだと月乃さんは教えてくれた。「名前もないのに、どう聴いても神か聖なる人々に捧げられたとしか思えない曲だから」

そう言つて、月乃さんはいつもの笑顔を見せてくれたのを覚えてい

る。また少し強くなった、ステンドグラスに打ち付ける素朴な雨音が、パイプオルガンの荘厳な音と重なりあう。

月乃さんと音と、雨の音の共演。

私は足音をなるべく立てないようにして、一番前の席へ向かう。今日は私の音の出番はないのだ。

お祈りを捧げた後、静かに腰掛け、視線は真剣な月乃さんに向ける。月乃さんの音と姿と、雨の音のみに心を傾ける。

健の上をしなやかに跳びまわる月乃さんの指は、いつもとても綺麗だ。いつものように音に合わせて動かされる白い足も、とても美しく動く。

少し固めの表情も、笑顔を絶やさないいつもの月乃さんとは、また違って魅力的だ。

ここで生まれ出る音は、ピアノの時の月乃さんの音と、少しだけ違う。ピアノの時は大体優しさが前面に出ている月乃さんの音だけど、今日はパイプオルガンのせいもあるけど、とても凛々しい。

私が聴き始めてから、5回ほど弾き終わると、月乃さんは満足したのか演奏を止めて、大きく息を吐き、猫みたいに伸びをした。

「うーん、満足」

私は立ち上がって、この宮の弾き手である月乃さんに対して拍手を贈った。

「ありがとう、陽子。でも来るの遅ーい、私と雨の音、半分ぐらいしか

聴いてなかったでしょ」

月乃さんは私の方に近づいてきながら、ちよつと怒った風にそう言った。半分ぐらいという事は、10回は同じ曲を演奏していたということだ。

月乃さんとしては今日この場であの曲を10回は演奏しないと満足できなかった訳だ。

「ごめんなさい。でも、学校中を月乃さんを探して走り廻っていたんですよ」

月乃さんが私のスカートと足を乗り越えて、隣に座る。

「でもねえ、今日は聖ウアレンティーンヌスの殉教の日だから、私がここで待っていることぐらいピンと来てくれないと」

そう言いながら、鞆の中からいつものように鼈甲の串を取り出して私の髪を梳かしはじめる。

「そうですね、以後気をつけます。月乃さんこれどうぞ」

私は髪を梳かしてくれている月乃さんの邪魔をしないようにしつつ、手提げ袋から今日一番の手土産を取り出す。

「わ、ありがとう。遅れたことは赦しましょう。私もちゃんと陽子の為に用意してあるよ、もちろん手作り！」

私の髪を梳かすのを少しだけ中断して、自分の手提げ袋から小さな可愛らしい亜麻色の包みを取り出した。

「あ、外側から既に可愛い」

あまりの可愛さに私の感情回路が反応した。月乃さんの笑顔がいつも以上に可愛く見えた。

「でしよう、陽子には和が似合うから今回も和の雰囲気にしてみました」

何だかお店で買ったものしか渡せない自分が申し訳ない。

「ごめんなさい月乃さん。私のは手作りじゃないんです。お母さんのお知り合いの方がやっている大好きなお店の一番私が好きなのやつなんです。不器用なので手作りとか自分でラッピングするのとか苦手です」

自分で言ってて恥ずかしくなって、顔が紅くなっていくのが解る。

そのまま俯き加減になってしまおう。

「陽子が好きなやつなら何の問題もないよく気にしなくていいって。あ、じゃあ来年は一緒に手作りしようか？ その陽子の好きなお店にも一緒に行ってみたいし〜」

そう言つて、月乃さんは私の両手に挟まれて、スカートの膝の上に乗せられていたものと、自分の亜麻色の包みを交換した。

「綺麗なオペラ色、洋の雰囲気だね。私も家で食べるから陽子も家に帰ってから開けてね」

そう言いながら、私のものを自分で編んだという、手提げ袋に入れた。

「しかし、陽子も沢山もらったね…。その手提げ袋も何、貰い物？」

普段の表情に戻つて、私の右側の手提げ袋を覗き込む。手は再び私の髪に伸ばされている。

「そうです、貰い物です。友達が大荷物を持った私を見兼ねたのかと」

言いながら月乃さんのものを手提げ袋に入れようとすると、

「そんな訳無い…それ…だし」

小声で月乃さんが何か呟いた気がして、

「え？」

思わず聞き返した。

「あ、私のは陽子の鞆に入れてね」

そう言うと、私の髪をまた梳かし始めた。

良く聞き取れないままだったけど、ひとまず月乃さんのものを鞆に入れた。

「陽子、三つ編みにしてみようか取り敢えず左側に一本だけ」

言い終わらないうちに、手早く編み始める。私の答えはもちろんイエスなので返答は不要だ。でも、

「はい、月乃さんのお望みのままに」

そう答えておいた。

この白の宮に響く音が、いつの間にか月乃さんの音と雨の音から、私の音と月乃さんの音に替わっていた。

しばらくして、外に出ると、まだちよつとだけ小さな滴が落ち続け

ていた。

「陽子、傘無いから入れて〜」

私の青色の傘に月乃さんが私の左側に入り込んでくる。月乃さんの勢いで、私の三つ編みと、その先に結ばれた水色の蝶が揺れる。

私の髪を編み終わった後、月乃さんが自分が身に付けていたリボンを外して結んでくれた。

「今日は三つ編みとりボンまで、ありがとうございます」

「いやいや〜良いよ。陽子の髪は綺麗だから何色でも似合う」

月乃さんがそういうので私も、

「月乃さんの髪だって凄い綺麗ですよ、今日もらったやつと同じ亜麻色」

そう言ってみたら、

「え、あ、そう、あ、ありがと…」

珍しく、あたふたして、ちよつと紅くなって俯いていた。いつもとちよつと違う感じでもとても愛らしいのだけど、おかげで何だかクロス歩道橋の分かれ道まで無言になってしまった。いつもとそう変わらないやり取りなんだけど、何でか今日に限っては妙に照れくさい。私までまた月乃さんと同じ顔色になってしまった。昇降口で、私も月乃さんもまた戴き物がしこたま増えた。

タイミングが良いのか悪いのか、分かれ道の所で雨は無事に上がった。

この時期にしては珍しく、雨上がりに直ぐ晴れ間が見え始めている。空の色は既に青から藍に変化している。

「雨、上がっちゃったね。ありがとう、陽子」

月乃さんは、いつもの調子に戻って私の好きな、いつもの笑顔を見せてくれた。

「じゃあね、また明日」

「はい、また明日です」

いつものように、その後ろ姿が見えなくなるまで見送った。

空にはもう、灯が点り始める。明日は良い天気になりそうな気がする。

家に帰って、月乃さんのものを開けてみると茶色い粉の付いた、丸っこいものがいくつも入っていた。

こういうのも作れちゃうし、本当に月乃さんは器用で何でも出来る人なんだな。

器用、で手提げ袋を思い出す。何をお返ししたら良いか、今度月乃さんに相談してみようかな。

そんな取り留めのない思考を巡らせながら、今宵の月を想いながら、聖ウアレンティーンヌスの殉教の日の夜、私にとって超重要な日の夜は幸福に更けていった。

終

百合団地シリーズ（仮） Vol. 02
雛結び

お雛様の隣って何でお内裏様何だろう。お雛様の隣にお雛様が居たつて、別に問題無いだろうに。

少なくとも私は、私の隣にお内裏様なんていらさない。世界で唯一人、私の心の大半を占める、あの子さえ隣に居ればそれで良い。

それをもしあの子に言ったなら、あの子はどんな顔をするだろう。

それなりに寒く、他の月に比べて短い、今月の終わりの日の今日。

窓の外は灰色の空が広がり、朝から白い塊が降りしきる。視線を下げれば、この地域にしては珍しく、良く積もっている。

「夜美、今日お雛様出す？」

私は毎年の習慣の事を頭に新たに浮かべつつ、隣の席に座る幼馴染に声をかけた。

「うん、いつも通りに今日出すよー。それよりも今日は四年ぶりのあの日だよー何の日だったか、彩月ちゃんはちゃんと覚えてる？」

とても嬉しそうな笑顔で、夜美は帰り支度する手を止めてこちらを振り返る。

夜美の特徴の、ふわふわにウェーブの掛かった、肩までのセミロングが同じく嬉しそうに跳ねる。今日の夜美も夜美の髪も、とても機嫌が良い。

「閨日」

私は反射的に微笑み返してしまうのを堪えつつ、その上機嫌な気持ちに水を指す為、敢えて一般常識に則った模範解答を返す。いつもの私達らしいやり取りだ。

「むーいや、そう言う一般的な回答を求めているんじゃないよー」

夜美は困ったような、私を非難するような表情と視線に変わる。夜美の、私好みの表情をいつも通りに見ることが出来て、私はとても満

足だ。

いつも笑顔を絶やさない夜美なだけに、この顔だけは、私以外は滅多に見ることが出来ない。

「解ってるよ。四年に一度、今年で夜美は四歳、四度目の大切な正式な誕生日だ」

夜美の表情を堪能してから、私は夜美の求めている答えを返す。

「そうそう、ちゃんとしたのはいつも通りにお雛様の日にやるけど今日は久々に二人きりでお祝いだねー」

夜美が嬉しそうに言葉を返してくる。夜美の場合は、一度がっかりさせてからの笑顔の方が、より魅力的な事を知っているのは、私だけだ。

夜美の誕生日は今日なので、例年はひな祭りに合わせて、家族ぐるみでお祝いしている。

忙しい夜美のお母さんが、せめて夜美の誕生日は全員揃って祝いたいと、色々模索しながら考えだした、苦肉の策とも言える。

それはうるう年である今年も変わらない。もちろん、朝から家族に祝福されてはいるし、今日もそれなりにお祝いはしているのではあるうけれど、それとは別に四年に一度、私達は二人だけでお祝いをする。

それは二回前、年月を八年遡る今日。二人でお雛様の前で、決めた約束だ。

「今日もねえ、お母さん帰り遅いんだよねー」

夜美は残念そうに言う、でも悲壮感はない。仕方ないなあ、そんな感じの態度だ。

夜美の、両親への深い愛情と信頼。加えて自分的には、私と二人でお祝いすることへの喜びも入っているかなと、勝手に感じる。

「じゃあ、お雛様も私達だけで飾ろうか。晩ご飯はどうする？家で食べる？」

そう言いながら、私は鞆を持って帰る姿勢になる。

「そうだなあーその時次第で。彩月ちゃんのお母さんのご飯も好きだけど、今日は彩月ちゃんに私の御飯食べてもらいたい気もするし」

夜美は難しい所だと言わんばかりに悩み顔だ。

「あ、陽子ちゃん。また明日ー」

夜美が教室を出ていくクラスメイトに手を振りながら声をかける。

「さようなら夜美さん、また明日。彩月さんも、またね」

夜美の声に反応して振り返る陽子さんの、ストレートな長い髪が、さらさらと風に踊った。

「またね、陽子さん」

陽子さんを見る夜美の視線に、少くない憧れが含まれているのを知っているのは私だけ。

「陽子ちゃんの髪、キレイだよねー。いつ見ても素敵。何と言っても…」

黒髪和風美人、数学の成績は学年トップ、運動全般球技含めて大得意。夜美が憧れるには申し分ない素敵な人。それが、月島陽子さん。

「そうだね、私達もそろそろ行くー」

夜美の言葉を遮って、私は夜美を置いていくように歩き出す。

「あ、待ってよー。あ、帰りにケーキ買っていこうねー。プレゼント楽しみー」

屈託ない笑顔を浮かべているであろう弾んだ声を、後ろに聞きながら、私は教室を出た。

廊下側の窓から見える外の風景もまた、灰色の空と降り積もった一面の白。白い塊は灰色の空の気まぐれのまま、おさまっているようだ。

クロス歩道橋を通り、21号棟について、3階まで上がる。夜美と二人で歩く、いつもの道のり。

二つ横に並んだ青いドアの上。右は龍上と書かれた我が家。左は中原と書かれた、もう一つの我が家だ。夜美が左のドアを開ける。

「ただいまー」

夜美の元気の良い声が、室内に響いた。

「ただいま」

その後ろに付き従いながら、私も夜美と同じ言葉を繰り返した。炬燵に入りながら、夜美と二人で飾り終えた、私の右斜め前、夜美の席の真後ろのお雛様を眺める。夜美のお雛様は七段飾りでもの凄く立派だ。

「彩月ちゃんは紅茶が良いかな？それともコーヒーが良い？」

台所の方から、夜美の声が聞こえる。夜美の高い声は、静かな室内に良く響く。

「紅茶でお願い」

私の声はそれほど高くないので、夜美の高い声は羨ましくもある。夜美の外見に合う、軽やかな声だとも思う。

「私はコーヒー。あ、甘酒もあるよ。一緒に持っていくね」

暫くすると、制服の上からひよこのあしらわれた見慣れたエプロンをした夜美が、珈琲と紅茶、甘酒と、帰りに買ってきたケーキをそれぞれお皿にのせて、お盆で持ってきてくれた。

「夜美は甘いもの好きな割にはコーヒーはブラックで飲めるよね。私には無理」

いつも通り、お盆には私の分の砂糖とミルクしかのっていないかった。

「えーそう？ケーキは甘いから飲み物は甘くなくても平気なんだよねー変かな？」

持ってきたものを炬燵の上に置き換えながら、夜美が上目遣いで聞いてくる。こういう仕草は夜美に良く似合う。

「いや、それもまた夜美らしさかなと思うし、良いと思うよ」

ブラックを飲んで苦そうにしている夜美は既に、私の中では想像もつかない。

「えへへ、ありがとう」

夜美は意外と何でも平然と越えて行ってしまうタイプかなと思う。夜美が自分の席に改めて座る。

「夜美、誕生日おめでとう。これプレゼント」

私は、手のひらサイズの小さな包みを夜美に手渡す。

「わ、ありがとう。今年はどんなのかなあ」

そうやって、夜美は嬉しそうに笑う。

「開けてみて。今年もこないだ見せてもらった着物の柄に合わせたよ。夜美とあの振袖には良く似合うと思う」

私の言葉に促されて、夜美はその包みを開ける。

「わ、可愛い」

小さな水色の、五枚の花びらの花簪。毎年簪を送っているけれど、今回は四年間アイデアを温めて、今日という日に合わせて、夜美の為に選んだ。色々な想いを込めて。

「ありがとう、いつも通りにひな祭りの時に付けるね」

この喜びの笑顔は、今は私だけのもの。いつか、私以外……にも見せるのだろうか。

いつものフオークで、お気に入りのオペラをつつきながら、ミルフィーユを崩しながら満面の笑みで口に運ぶ夜美を眺める。

エプロンは外して、右脇に置いている。夜美は、ケーキは甘すぎるぐらいのものが好きだ。

私は甘すぎるのは苦手で、チョコレート系の甘さ控えめのものを選ぶことが多い。今日のオペラはその中では甘めの選択だ。

私はいつまでこうして特等席で夜美の嬉しそうな顔を観ていられるだろうか。

四月に高校に入学してから、夜美の視線の先に、同じ人がいることが多くなった。

夜美はみんなと分け隔てなく接するので、今までにはそういう事はなかった。気付いているのもきつと私ぐらい。

「甘酒飲んだら眠くなってきたやつたー」

夜美は、あらかたケーキを片付けた後、そう言って横になった。

「制服皺になるよ。それに、食べて直ぐ寝ると牛になる」

その牛もまた、夜美なわけだから可愛さは変わらないのだろうけど。

「モーモー。お腹空いたら起こして良いよー」

私の方を向いて目を閉じて、そう言うと直ぐに寝息を立て始めた。夜美は昔から寝付きがいい。

私の正面の位置にある窓の外を見ると、白い欠片がまた、灰色の空の気まぐれのままにちらつき始めている。

私は、いつも通りに夜美の部屋に入ると、肌掛けを一枚押し入れから出してくる。夜美のお気に入り、オレンジ色のやつだ。

炬燵に戻つてくると、私は夜美に肌掛けを掛けてやりながら、夜美の隣に潜り込む。

「ん、う」

夜美はそんな言葉を漏らしながらも、起きる気配なく寝息を立て続ける。私はいつものように、夜美の胸に顔を埋める。

夜美の命の音が、耳に届く。この場所が私は一番安心して眠れるのだ。

お雛様の元、夜美の音と微かな白い欠片の音を聞きながら、私もまた夜美と同じ世界へと落ちていった。

目が覚めると、夜美の胸の中、身動き取れない状態になっていた。

何だかいつもと違う。

いつもなら、私が起きた後、夜美を起こして、晩ご飯を作ってもらって二人か、もしくは帰ってきた夜美のお母さんと一緒に食べる。

なのに何故か、今日は身動きが取れない。何だか夜美の胸元がちりと捕まえられているような感覚がある。夜美の胸はそこまで大きくない筈なのにおかしい。

嬉しいけどおかしい、変な感じだ。

夜美から顔を離そうとすると、嫌と言うかのように締め付けが厳しくなる。胸元から私を離さないと言う感じだ。状況としては、夜美が両手で胸元に抱きとめて、頭を撫でたり、髪をいじったりしているみたいだ。何だか恥ずかしい、自分の頬が紅くなるのを感じる。

「夜美、起きてるの？ちよ、ちよっと離して」

夜美が何らかの意思を持って、私を胸元から話さないでいると思われるので、そのままの体勢で夜美に声をかける。

「ヤダ」

夜美からは一言しか返って来なかった。何か怒っているようにも

聞こえる。締め付けもより一層厳しくなった感じがする。

「やだって、どうしたの夜美。何か、怒ってる?」

声のトーンで怒っているのは感じ取れるけど、怒られている理由が解らない。これは、ちゃんと話を聞いて、私のお姫さまのお怒りを沈めないといけないと思った。

状況的には別に嬉しいのだけでも。

「怒ってる」

怒ってる割には嬉しそうな感じも混じっているのだけど、きっと私にしか解らないレベルだとは思う。

「ええと、すみません夜美様」

「何に対して謝って、いるのかな?」

ちよつとだけ声のトーンが怖くなった。いや、可愛さは変わらないけれども。

たまに夜美の機嫌を損ねることはあるけれども、これはいつも以上かも知れない。ここは素直になり夜美にちゃんと話して貰った方が良さそうだ。

「ごめんなさい、解りません。教えて下さい夜美様」

そう言えば、夜美様何て言ったの何年ぶりだろう。

「よろしい、とにかくね、最近の彩月はおかしい。今月半ば、そうバレンタインぐらいから何か拗ねていると言うか、可愛くない感じ」

夜美に彩月って呼ばれるのも、何年ぶりな気がする。

「加えて、たまに私の前でも寂しそうな顔をする。何かあったの?その、时期的にも、し、失恋とか」

最後は妙にトーンの上があった声になっていた。ああ、これはもう正直に言うしか無いかなあ。

私は意を決する事にする。夜美を不安にさせるぐらいなら正直に言った方が良い。

少しの沈黙の間、白い欠片の音だけが二人を包む。次に口を開いたのは二人同時だった。

「前に行ってた部活の先輩と何かあった?」

「夜美にだよ」

ん？誰だつて？また同時に口を開く。

「私?!誰が私に?!」

「部活の先輩って誰のこと?」

そこまで答えないといけないと。

「音無先輩」

「私が夜美に」

なんか変だ、話が噛み合ってるのか食い違ってるのか良く解らない。その後の一言は二人共同じだった。

『ちよつと待つて、話が噛み合つてない!誰が誰に?!』

「えーと、つまり音無先輩には日頃のお礼をただけと」

未だ胸元から離して貰えない状態で、出てきた断片的な情報から、夜美が話をまとめ始める。

「で、彩月は私に好きな人が出来たと思つていたと。で、その相手は陽子ちゃんだと」

自分の心の内を自分の前でさらけ出されていくのは、なんとも気恥ずかしい。

「はい、その通りです」

頭上から呆れたようなため息と、夜美の声が聞こえる。

「はあ、どこをどうしたらそんな勘違いを。私だつて陽子ちゃんには日頃のお礼をただけなのに」

そうだったのか。でも何のお礼だろう。

「日頃つて、何のお礼?」

「うーん。まあ、良いか私も正直に言う。彩月のことに決まつてるじゃない。最近元気なかつたりするし」

何と、そういう事でしたか。

「そういう事だったとは、でも何か陽子さんのこと特別な目で見てたりとかしてたじゃない?特に髪とか」

「ああ、それは陽子ちゃんの髪凄く綺麗だから、誰かさんの髪と同じだね」

そう言つて、抱き締めたままの私の髪を夜美は優しく撫でる。

「手入れの仕方とか、教えてもらつてたんだよ。最近彩月は触らせて

くれなかつたけど」

「そ、それは。陽子さんに勝てないとか何とか気持ちの置所が色々
…」

最後ははつきりしない感じになった。何とも。

「何言ってるのか。彩月の髪は昔から陽子ちゃんと同じぐらいに綺麗
じゃない。四年前に、大好きって言ったのも、私のものって言ったの
も忘れたの？おバカさんね」

そうでしたか、それはすっかり忘れていました。でも、確かに四年
前からほとんど切らなくなっていた気がする。それがきつかけだっ
たか。

「申し訳ない、すっかり忘れていました。返す言葉もございません」

「私のために伸ばしてくれているのかと思ってたらさ、最近触らせて
くれなくなつて、先輩が出てきて色々考えちやつたのよねー。だつ
て、彩月ああいうタイプ好きでしょ。私に似てるもの。音無先輩」

ああ、そこは良く解つていらつしやる。さすが、夜美。でも一つ間
違い。

「そうだね。でも、夜美より音無先輩を好きになることはないよ絶対
に」

「いつもそう言つてくれていれば勘違いなんかしないのに。毎日ずつ
と一緒にいるのに、私もだけど、言葉が足りないね。彩月は」

呆れたように言いながら、私の頭を撫で回す。ああ、今日は一週
周って幸せ過ぎるかも。

「今回の簪の意味も解つたよー。て言うか、教えてあげたの私じゃな
い。これは八年前かな？それも忘れていたでしょ？」

「うん、夜美から教えてもらったことはすっかり」

もう幸せいっぱいなので、素直にスラスラ喋った。

「何ともね私の想いに反したおバカさんです事。もう今日はこの簪は
彩月にさしてやる。結つたりなんかしないで超適当に」

今日はもう、全部夜美に任せる事にする。私はもう幸せに浮かれ
ぎているので夜美のやること何でもオツケー。

「了解しました。夜美様の仰せのままに」

窓の外は既に暗くなり、音だけが白い欠片の存在を私達に示していた。

夜美の音と混じり合いながら。

しこたま二人でじゃれ合った後、夜美は起き上がって晩ご飯の用意をした。

それから、お雛様の前に戻ってきて、お内裏様と三人官女の真ん中の人形を入れ替えて言った。

「これも忘れてたでしょ？ 私のお雛様は、四年前からお内裏様の位置に女の子が入るの」

これはちよつと思いついた。一昨年と去年はすっかり忘れて普通に飾ってしまったけど。

「どつちがどつち？」

私がそう聞くと、夜美は悪戯っぽく笑いながら言った。

「私がお雛様に決まっているでしょ？ 彩月はお雛様に見初められた三人官女。お内裏様も両手に花だし、これで円満解決なのよ」

なるほど、そこまでは私では思いが至らなかった。お内裏様の存在、完全に眼中に無かったよ。

感心した素振りしていると、夜美の声に良く似た、夜美よりも少し低い声が玄関から響いてきた。

「ただいまー」

私と夜美は、二人争うようにかけて行って、夜美のお母さんをお迎えした。

『おかえりなさい』

晩御飯の間、夜美のお母さんは私の頭に適当にさされた簪を、面白おかしそうに、不思議そうに見ていた。

終

水踊姫

それは朝から雨が降る、ある日の午後のこと。

静けさの漂ういつもの室内。炬燵の上に乗せたマンガ本に視線を落とす私の耳に聞こえるのは、私と夜美の右方向にある窓の外から伝わる、規則正しい静かな滴のリズムと、私の横で眠る夜美の、同じく規則正しい呼吸音。

室内を照らすのは、窓の外から挿し込む鈍い光のみ。余計な光もなく、私の好きな音だけが漂う、心地よい空間。

私の腰の辺りには、夜美の愛らしい振動が伝わってくる。

その振動が、徐々に規則正しさを失っていく、眠り姫の目覚めが近づいている。

数度、不規則な呼吸音を感じた後、言葉を伴う明確な意思が、私に響く。

「……焼きそばが食べたいかも」

眠り姫の目覚めの第一声は、傍らに傳く王子に向けてのものではなく、自らの内面についてのものだった。

まあ、いつものことだけど。

「おはよう、夜美。焼きそば食べたいの？今から作る？おやつ時間ではあるけれど」

私は何度も頭の中で繰り返し、既に覚えこんでしまった二人の主人公の演奏を、その世界を閉じることで中断させる。

私にとって、とても大切な物語であっても、眠り姫の目覚めのご要望よりも勝ることはない、残念ながら。

私はこの空間のもう一つの流れを示す二本の針に目を向け、自らの言葉を確認する。

夜美の言葉は、タイミングとしては丁度良い。

「うーん、何て言うかちゃんとした焼きそばでなくて、むしろカップの焼いてない焼きそばが食べたい」

今日の眠り姫のご要望は、自らの調理の腕を伴う必要のないもの
ようだ。

だけでも、一つ問題がある。私は夜美の方に顔だけ向き直る。

「構わないけれど、カップ焼きそばは夜美の家に買い置き無いよね？
私の家にも無いと思うし。どうするの？」

私は先程から少しだけ勢いの弱まった、滴のリズムを聞きつつ、半
ば答えを予測しながらも、夜美に問い掛ける。

「買いに行きたい。雨も降っているし、二人で傘差しながら買いに行
こう！」

屈託の無い笑顔を私に向けて、魅力的な言葉を提示する。そう、夜
美は少し弱めなぐらいの雨が好きなのだ。

もちろん、私もそう。

「解った、じゃあ行こうか」

「うん！」

善は急げというやつか、お互いの言葉が重なると同時に、私も夜美
も出掛ける準備を整えだした。

玄関を出て、一階から外に出る所で夜美の持ってきた傘を受け取っ
て二人の頭上に差し掛ける。夜美のお気に入り、オレンジ色の、
二人が充分入れる少し大きめの傘だ。

隣に立つ夜美は、ふわふわもここのピンクのピーコート。夜美に
良く似合っていて、私の好みに合っている、二人で買いに行つたとい
つものやつだ。

何だか嬉しそうで、鼻歌交じりでご機嫌だ。この曲は何の曲だった
か。

私の方は、夜美のお母さんから貰った、黒のジャケットコート。夜
美の好みに合わせた、いつものやつ。

滴から、細かな粒子に覆われたいつもの道を歩く。時折、広がる池
を掻き分ける、夜美の足元からの和音が鼻歌に加わる。

いつものこと、夜美は水素を愛している。そして、水素に愛されて
いる。

「夜美って、そう言うの大好きだよ。私にはとても無理」

団地内の商店街にある、行きつけの個人商店。時代の流れか、微妙にコンビニつぽい。

夜美が選んだのは、最近出たという定番カップ焼きそばの激辛版。加えてスープにいつものワントンの坦々版。

「うん、辛いもの好きー、彩月は辛いものは全然ダメだよね」

その通り、私はどっちも夜美のチョイスの普通版。辛すぎるのはどうにも無理だ。

買い物済ませて、我が家に戻る。団地内の商店街だから、片道五分程度の二人散歩。

周囲を満たす粒子は、濃度を変えることもなく、夜美の周りで踊る。

「ふんふんふんー。やっぱりーかやくは麺の下に敷かないとーダメだよねー」

妙な鼻歌交じりに、焼きそばの準備をする夜美。外で粒子を全身に浴びたせいかわ、さつきまでよりも更に「ご機嫌状態だ。

「たいせつなものながれてしまっーきがしてー」

鼻歌に歌詞が混じったようだ、お湯を入れながら、どうにも最高潮にゴキゲンらしい。

このあと三分、シンクの前にて二人で待つ。

「湯切りのおとがー貴女を起こさぬようにー」

先程までの歌の、続きつぽいものを歌いながら湯切りをする夜美。そろそろお約束の。

べこんっ

「あはは、鳴った鳴ったー」

シンクが温度の変化で定番の音を出す。こんな音が鳴ったら、きつと夜美の歌に歌われている貴女も、起きてしまうだろうに。

私の分の湯切りも済ませ、こちらも出来上がったワントんと、いつもの飲み物と一緒にお盆に乗せて、炬燵の上に置いたら、いつもの位置に座る。

「ソースとーふりかけとースパイス入れて、ハイ出来上がり！」

焼きそばの出来上がりと同時に、夜美の奇妙な歌も終了したよう

だ。

「じゃあ、いただきますしよー」

「はい、いただきます」

しばし、二人とも食に没頭する。育ち盛りゆえ。

「彩月、ちょっとこれ食べてみなよ」

そう言つて、見るからに辛そうな自分の焼きそばを箸で取り上げて、私の方に示す。

「むうう、何か凄く辛そうな感じ」

しかめっ面を夜美の手元に向けながら私は答える。

「大丈夫だつて、そんなに辛くないよ」

「本当かな、まあ一口だけなら」

そう答えると、私は口を開ける。

「うんうん、一口だけ」

夜美の手で、焼きそばを口に入れてもらう。しばらく、自分の口中で味わってみる。

「?!、辛い！すつごく辛い！」

思わず口元を抑える。感覚で言うなら火が出そうな感じだ。

「あはは、大丈夫彩月ーはいコーヒー」

夜美が嬉しそうに差し出してくれたいつものコーヒーを飲んで、ようやく一息つく。

「やっぱり夜美とは舌の構造が全く違うみたい。これはもう私には辛すぎて駄目」

「うーん、そんなに辛くないと思つたんだけど。ごめんね」

ちよつと心配そうな顔つきになつて私の方を覗き込んでくる。少しフオローしてあげたくなつたけど、もう二度と同じ事をしないで貰いたいので、何とか苦笑いしつつ、夜美の頭を撫でるだけで、我慢しておいた。

「いやー美味しかった。満足！ごちそうさまでした」

「うん、ごちそうさま」

二人とも食べ終わつて、食後のお茶時間。ふと気づけば、窓の外から聞こえていた音は完全に聞こえなくなつていた。

夜美が視線を窓の外に向ける。

「雨、止んじゃったみたいだねえ」

ちよつと残念そうなのは、夜美にとって毎度のこと。夜美にとっては、古くからのお友達との、しばしのお別れなのだ。

私は夜美の残念そうな心音に先回りすることにする。

「ちよつと、散歩行く？夜美、雨の止んだこの時間も大好きだものね？」

夜美は、私の方に向き直って、いつものように嬉しそうに笑う。

雨が上がった後の、水素を含む空間もまた、夜美は愛しているのだ。

「うんーあ、久々に子供の頃に良く行ったあの神社まで歩いてみようよー時間的に暗くなる前に戻って来れる筈！後は、いつものスーパ―とお店に寄って晩ご飯の買い物しようね。あとあと……」

眠りの姫から、目覚めて水に愛される姫に戻った夜美は、その心の赴くままに、自らの望む水素を求めて、王子を引き連れて、歩き回ろうと思っっているみたいだ。

はい、姫さま。仰せのままに、貴女の愛する、水素を求めて。

終

桃色少女

花月、草木いよいよ生い茂るはずの月。一日毎に、温度は僅かながら上がっていき、道端の草木も少しずつ鮮やかさを取り戻す。

とは言え、まだこの時期特有の、時々暖かい陽と大多数の程々に寒い日の、気まぐれを繰り返し、空気は草木のお色直しを待つ私達を、焦れさせる。

春は、まだまだ遠いかな？

十字型の夕陽に照らされた、月乃さんとその最愛の友。

いつもの場所で、いつもの待ち合わせ。いつものように、月乃さんの演奏を聴きながら、最近のお気に入りには視線を落とす。

完全なる証明。それは、如何様にしてなされたのか、興味は尽きず、進むその足は止まらない。

既に人影はなく、この場で月乃さんの産み出す旋律に、耳を傾ける者は私一人。

私の集中を邪魔することのない、その音階は私をより深い真理の世界に誘う。

何故彼の人は、真理に辿り着きながら、それによって自らに与えられた栄光、その全てを置き捨てたのか。

未だ真理の探求の為の手段を学んでいる途中である私には、到底未だ知る由もない。

私の手の中にあるこの本が、私の学びの一助になることを願いながら、彼の人の背中を、月乃さんの音に背中を押されながら、心の内で無心に追い続けた。

一つの区切りの章を読み終えた時、丁度良く月乃さんが演奏を終えて、私に話しかけてきた。

「明後日、陽子の家に行っても良い？」

月乃さんの言葉は、正直意外な言葉だった。

「明後日ですか？日曜日ですし、別に問題ないですけど…」

私は言葉にならない疑問符を全身に乗せたまま、本を閉じ月乃さんに向き直った。

月乃さんはお友達のお片づけ中だ。

「ほら、先月に来年一緒について言ったけど、来週にホワイトデーがあるでしょ？陽子が良ければ、明日二人で一緒にお返しする分を作りたいなーと思つて」

そう言いながら、ピアノにいつものように鍵を掛けた後、私の右隣に座る。

月乃さんの纏う華やかな良い香りと、綺麗な亜麻色の髪が私の鼻と肩を撫でる。

月乃さんは、いつも素敵なお香りを纏っている。

そして、いつものように私の髪に触れる。

「今日の初感触」

月乃さんはそう呟いて、私の髪を、その鍵盤をなぞるのに適したしなやかな両手で、さらさらと弄ぶ。

月乃さんの手の感触が、髪を通して直接伝わってくる。

月乃さんは幸せそうな顔をしている。今日はいつもの櫛は使わないみたいだ。

私も月乃さんの手に直接触られる方が、心地良い。いつも、大事なものに触れるように、優しく私に触れてくれる月乃さんの手が、私はとても好きだ。

「そういう事ですか、ありがとうございます。何を作るんですか？」

十字架を通す陽の光が、月乃さんの髪を更に濃い色に染めている。

「うーんとね、ホワイトデーだしクッキーが良いかなあと思つてる」
月乃さんは私の髪に視線を落とすまま、そう答える。

「クッキー…難しそうに感じます。私でも大丈夫でしょうか？」

私はお菓子作りや料理、手先の器用さが必要となりそうなものは、まるで駄目だ。やっぱり正直不安になる。

「大丈夫！私がちゃんと教えるから。陽子は心配しないで、材料とか道具も私が持つていくからあんまり難しく考えずに気楽にね」

月乃さんは私の髪を束ねたり数えたりしながら、そう答えてくれ

た。頼もしい。

「ありがとうございます、嬉しいです」

唇の端が勝手に緩む。月乃さんの言葉は一言一言がとても私の心に響く。

「きつと陽子からもらうみんなも喜ぶよくお返しは全部私と作るクツキーにしてね」

その言葉の時だけ、月乃さんは私の方を向いた。少し真剣な表情だ。

「はい、みんな喜ぶと思います」

私は素直に頷いた。

静かな時間が二人を包む。聞こえる音は月乃さんの手と、私の髪が奏でる音だけ。

いつの間にか、十字の光はその姿を消し、窓の外は紫と藍色の混じり合う、夜の前に僅かばかり見せる表情を浮かべていた。

「月乃さん、そろそろ帰りましょうか？」

いつもの帰る時間に近づいて、私はそう月乃さんに呟いた。

月乃さんは丁度私の髪の一部をまとめて、蝶を結んだ所だった。今日の羽の色は白だ。

「うん、帰ろう。今日もこのリボン付けて帰ってね」

月乃さんは私の髪にとまった蝶から手を放し、立ち上がりつつそう言った。

そう言えば、月乃さんが我が家に来るのは、今回が初めてだ。

ピンポーン

チャイムの音が響く、来たのは恐らく私の待ち人。

本を閉じ、居間の炬燵を出て、玄関に急ぐ。私の奏人である、あの人をお待たせするのは私には許されない。

お気に入りのサンダルをつっかけ、チェーンを外して鍵を開ける。ドアを開けると、そこには桃色の少女が、緊張した面持ちで経っていた。

ピンクのマフラーに、ピンクの毛糸の帽子、ピンク色で縁が白で彩られたコート。

桃色の上に流れる亜麻色が映える。今日の少女はいつも以上にとても愛らしい。

普段の美しさの中に、可愛さを割増増量した感じだ。手元には、駅前のそこそこ有名な洋菓子店の、手提げ袋を下げている。

「いらつしやいませ」

私は満面の笑みで、客人を迎える。しかし、月乃さんに比べて、私の普段着つぷりはどうだろうか。いつもの、水色と白の横縞のセーターに濃い目の紺色のジーパン。

髪もいつもと違って、こないだ月乃さんに貰った白のリボンで後ろで縛って、お馬さんの尻尾だ。

「お、お邪魔します。これお土産です」

月乃さんが、勢い良く手提げ袋を突き出す。何となく顔が紅く、緊張しているように見える。

「ありがとうございます、月乃さん。取り敢えず上がって下さい」

そう言って、手提げ袋を受け取る。このお店のお菓子は美味しいので非常に嬉しい。

「はい、お邪魔します」

月乃さんが靴を脱いで上がってくる。今日は靴も、桃色の可愛いやつだ。月乃さんはまだ緊張しているみたいだ。

「どうぞどうぞ、ひとまず居間の方へ」

月乃さんを居間に促す。背中にはうさぎ耳の付いた、うさぎの顔の付いたリュックを背負っている。色々持ってきてくれたみたいだ。

「あれ？…両親は？」

居間を見回しながら、月乃さんが呟く。

「ああ、今日は親戚の家に二人とも出掛けてます」

「え〜っ！聞いてない！そんなの聞いてない〜！」

いつもの感じに戻って、月乃さんが叫ぶ。

「すみません、今日は夜まで私一人です」

そう言うと、月乃さんはまた紅くなった感じがする。

「き、聞いてない…二重の意味で聞いてない…」

何か恥ずかしそうに俯いて小声で呟いた。

「かなり砂糖とバターを入れるんですね」

家庭科の授業以外では殆ど使ったことのない、水色のチェック柄のエプロンを付けて、メモを持って学習スタイルの私。

「まあね〜今回は特に作らないといけない数も多いし」

材料を混ぜたり、冷蔵庫に入れたり、オーブンに入れたり、私も手伝いつつ、月乃さん主導で作業は進む。

「あ、定番の砂糖と塩を間違えるとかは禁止だからね。まあ、塩も使うからよそ見してて間違うとかはあるかも知れないから、それは気を付けて」

ああ、そういうのは何かで見たことがあるかも知れない。

「でも、粒子の大きさ形状的には味の素の方が間違えやすそうにも見えませぬ」

「ああ〜それは新しい視点かもね〜」

笑って答えつつも手は休めない。さすが手際が良い。ピンクエプロンの真ん中の、黄色いひよこが忙しげに揺れる。

「うくん、ココアが足りない」

手を休め、腕組みして月乃さんが眉を顰めて呟く。

「じゃあ、買いに行きましようか?」

私はエプロンを外して尋ねる。

「うん、買いに行こう。駅前のスーパーにお気に入りのがあるから」

月乃さんもそう言って、エプロンを外す。

そうなる私の相棒、あいつの出番だ。

「ねえ、陽子」

「はい?」

私は相棒に跨って、月乃さんの方を振り向く。

「二人乗りって良いのかな?」

月乃さんは心配性だ。

「大丈夫ですって、危ないからちゃんと私に掴まって下さいね」

「え、っ、掴まるって、ど、どこを…」

今日はちよつと長めの白のスカートなので、私の後ろに横向きに座る月乃さんは、また紅くなっている。

今日の月乃さんは紅くなったり、白に戻ったり、今日の装いとも相まって、何だかピンク色な感じだ。

「まあ、腰の辺りでも…お好きなのところを」

「こ、腰…す、好きなところ!?!」

「はい」

何を焦っているのかよくは解らないけど、月乃さんは恐る恐るといった感じで私の腰に手をまわしてきた。

月乃さんのしなやかな腕の感触が、腰に伝わり、お腹の辺りに柔らかな、ちよつと体温が低めの月乃さんの手のひらの感触が伝わる。

「じゃあ、行きますよ」

「はい」

月乃さんは俯いて緊張気味に答えた。

私は良い気分です、昨日までよりも少し暖かい空気と、青い空の中を走りだした。

「月乃さん、今日は暖かいですね」

「うん」

何か月乃さんの口数が少ない。

「あ、月乃さん水仙の花が咲いてますよ。でも、もうじき水仙の季節は終わりかな?」

「そうね」

やっぱり何を言っても反応が薄い。それに反するように、月乃さんの手のひらは段々と暖かさを増していく感じがする。

何だかこの陽気とも相まって、とても心地良い。

「月乃さんの手も素手なのに段々暖かくなってきましたよ。もう完全に手袋のいらぬ陽気ですね」

「!?っ」

月乃さんの手がより一層熱くなる。また顔も真っ赤だったりするのだろうか。

「あ、月乃さん梅の花が咲いてますよ。紅と白、今日の月乃さんと同じ桃色も」

駅前に行く道の途中にあるお寺の敷地内の梅の花、まだ満開ではな

いけれど今日の陽気に押されたのか大分咲いていた。

「本当、綺麗く私と同じ色で何か嬉しいな」

「月乃さんの今日の服装可愛いですよ。月乃さんに凄く似あってます」

梅の花を眺めながら、後ろに座る桃色の少女の面影を思い浮かべた。

「…あ、ありがとう」

そう聞こえた後、背中にふわりと温かい柔らかな感触が、少しの重みと一緒に伝わってきた。

「春は近いですよ、月乃さん」

そう言うのと、背中感触はさらに強さを増した。

「そうだね。もうすぐ春だね」

背中に感じられる月乃さんの感触が、とても嬉しい。

「じゃあ、今日はこれで帰るから。ご両親によろしくね。今度はちゃんとご挨拶いたします。って伝えておいてね」

帰り支度を整え、玄関で靴をはく月乃さんが珍しく先輩らしい言葉を言う。

「解りました、今日はありがとうございます。でも、晩ご飯食べていかれても良いのに。もうすぐ両親帰ってきますし」

「いやいや、何て言うか自分の主義としてちゃんとしたご挨拶もせず、いきなり晩御飯をごちそうになるのはNGだし」

手のひらをひらひらとさせながら、やっぱり先輩らしいことを言う。

「あ、それと来週は今日作ったクッキー以外はあげたら駄目だからね。これ絶対」

人差し指を私に向けて、念を押すようにそう言う。何だか頭を撫でたくなるポーズだけど、今撫でたら何となく怒られそうな気がするのので止めておいた。

「はい、月乃さんと作ったクッキーだけが、私のホワイトデーのお返しです」

無難にそう答えておいた。

「よろしい、じゃあねまた明日」

今日一番の微笑を私に向けて、桃色の少女は帰っていった。
春の訪れの兆しを私に残して。

終

桜探し

薄紅色の欠片、空に舞い、風に踊る。底に落ちる一滴、連れ添って。一掬い、その想いの中で、揺蕩い、微睡む。

花の咲く月、私の一番好きな季節。夜美にとっても、水と戯れる日々を別にすれば、一番好きな季節。

一雨ごとに、少しずつ温度は上がり、温もりの中で、静かに目覚めの時を待っていた、この季節に最も愛された薄紅の花が開く。

「今年も咲いたねえ、桜」

いつも通りに夜美の声が、本の世界から私を引き戻す。

私の愛する乙女二人の物語は、今日の所は薄紅色に彩られた出会いで終わった。

この後の二人の日々に、想いを馳せながらも、私は手元の本を閉じて夜美の方を向く。

ここから先の私の時間は全て、夜美の為だけの時間。

「咲いたね、まあ満開と言えるのは先週末から昨日今日にかけてだった感じだけど」

夜美は私にいつもと変わらない横顔を見せながら、窓の外を見ている。

今日の空は、僅かばかりの、白色の色彩も交えて、静かに佇む春の蒼だ。

つまりは、夜美にとっては絶好の日だと言うことだ。

「よしっ！桜探しに行こう！」

夜美は嬉しそうな顔をこちらに向ける。いつもと同じ笑顔と、予想通りの言葉だ。

「了解しました、姫様。では、まずはどちらへ参りますか？」

その笑顔に、思わず釣られて微笑み返しつつ、私はガラステーブルに手をつけて立ち上がる。続けて夜美も勢い良く立ち上がる。

「うんっ！まずは定番の第三公園から！」

夜美のふわふわの髪が、勢いに任せて跳ねる。ほのかな桜の香りが漂ってくる。

なんだ、私にとっての桜は探すまでもなくここにいる。

この団地内の隅っこの方にある第三公園。ここは、団地内では一番多くの桜が植えられている。

先週末は土日共に、お花見の団地住人で賑わっていたけれども、今日は何人かの子供たちと、ママさん達がいるだけだ。

私達も先週は、家族ぐるみで一応のお花見はしていたりする。

先週は頭上にあつた薄紅色の花びらは、今は私立の足元に少しずつ広がっている。

時折ひらひらと舞う花びらは、この公園の空気さえ薄紅色に染めていくかのよう。

薄紅色の中を走り回る子供たち、花びらの中で眠る幼い子、花びらを捕まえようと手を伸ばす小さな子。

その子達に優しい目を向け、微笑みながら語り合っているママさん方。

この、百合の丘団地と言う住空間の、濃密な幸福を凝縮したような優しい光景。

その暖かさに私は酔いしれる。

「大分散ってるねー」

嬉しそうな夜美の声が聞こえる。出来うる限りの花びらを踏まない努力を重ねつつ、薄紅色の空間を跳ね回る夜美。

子供たちとやっつてることがほとんど変わらない。時々子供たちと何か話したり笑い合ったり、追いかけてあつたりしながら散りゆく桜を楽しんでる。

黄色の春物ジャケットが薄紅色の中を跳ね回る姿は、さながら黄色の蝶。周囲を跳ねる子供たちも、また白色の蝶。

その光景はとても美しかった。

けれども、美しさよりも可愛らしさ、微笑ましさに心奪われて、私はただ白色の蝶を引き連れた黄色の蝶が舞う姿を、その目で追い続けた。

「さーて、次はあそこ行こう。桜のお寺」

幾つかの桜の花びらと、部屋で嗅いだ時よりも更に良い香りを、ふわふわの髪にまわりつかせたまま、頬を花びらと同じ色に染めて、黄色の蝶は言う。

桜のお寺、そこは私達が生まれるよりもずっと昔に学校だったらしい。その敷地内に、その頃から植わっている桜が第三公園以上の密度で花を咲かせる。

今の時期の桜が一番好きな夜美にとって、第三公園以上のお気に入りの場所だ。

「夜美、桜の花びらが髪に幾つかついているよ。取っても良い？」

夜美のふわふわの髪に少しだけ触れながら、聞くだけ聞いてみる。

「んーまだいいよー今取りたい？」

顔を少し上げて、上目遣いで聞いてくる。少しだけ触れていた手が、桜の香りに埋もれる。このまま触れていたい衝動に駆られる。

「いや、取りたいって言うよりも、単に触りたいって思っただけ」

正直に言う。最近の私は雛祭り以前と比べると、昔以上に大分素直だ。

「うーん、ちよつと我慢して。どのみち後で思う存分触らせてあげると、取らせてあげるから」

恥ずかしそうな顔をする訳でもなく、当たり前のように夜美はそう返してくる。

多分、正直に言うまでもなく夜美には解っていたはず。解ってて敢えて聞いた上で、お預けする夜美の心理は、実は私の方は全部は良く解らない。

桜のお寺。この季節意外にもたまに夜美と来るけれど、この時期のこのお寺は全てを圧倒する美しさがある。

「いやー予想通り、凄い量の花びらー！桜の絨毯だね！」

お寺の門をくぐると、そこは一面の薄紅色の雪。全て桜の花びらであることは頭では解っているのだけれども、思わず雪と表現してしまう。

こうなってしまうては、夜美も第三公園の時のような、花びらを踏まない努力は諦めたようで、桜の花びらを絨毯として、自分の足で、その感触をしっかりと味わうことにしたようだ。

夜美はお寺の敷地内をくるくる跳ね回る。先程よりも濃密な薄紅色の空間で、黄色の蝶が一人で舞い踊る。観客は私一人、可愛らしい妖精の楽しい姿を独占する。

先程よりも多くの花びらが夜美の髪に舞い降りて、溶け込んで行く。

「凄い綺麗だねー彩月」

私に笑顔を向けてくる夜美は、さながら桜の妖精のようでとても可愛らしかった。

その瞬間、今日一番の強い風がお寺の敷地内を吹き抜けた。

「キャッ」

夜美はいつもの夜美らしい小さな悲鳴をあげた。強い風で、沢山の桜の花びらが舞い上がり、夜美の姿を薄紅色でかき消す。

静かに舞い降りた後、その場所にいた夜美は、今まで以上の桜の花びらに包まれていた。

「うーん凄い風。花びら一杯被っちゃった」

そう言って、ちょこちょこことちよつと小さめの歩幅で私の方に歩いて来る。

黄色と淡紅色に包まれた夜美は何ともいつも以上に子供っぽく、愛らしく見えてしまう。

「あ、彩月そこのお手水舎見てみて、桜の花びらが浮いていて綺麗」

いやいや、桜の花びらを被った今の夜美も充分綺麗、とか思いつつ夜美の指差す先を見る。

円形の水面に浮かぶ、花びらが五つ。底に沈んでいる花びらが二つ。底に敷き詰められた綺麗な石と相まって、幻想的な感じ。

夜美は水の中に手を入れて、石一つと花びら一つを掬い上げる。

石は、紫色と灰色と青色が合わさって、派手過ぎない落ち着いた色合いが素敵な石。そこに花びらの薄紅色が添えられて不思議な魅力を感じさせる。

「この石、持って帰っても大丈夫かな？」

口調は疑問形だけど、私の方に向けられた顔は持つて行く気満々だ。

「お寺に置いてある物を勝手に持つていくのは感心しないけど……取り敢えずお願いしてみたら？」

と言う訳で、二人で両手を清めた後、二人でお祈りをした。カトリック系の学校に通っているけれども、お祈りする先は選ばないようになっている。

「大丈夫かな？」

お祈りの後、夜美が上目遣いで聞いてくる。

「大丈夫だと思うけどね……あ、雨？」

私が言い終わるか終わらないかの所で、一滴私の頬に落ちてきた。

でも、二人で空を見上げてても青空は変わらず。ただ、ちよつとだけ雲が雨雲っぽくなってる。

「天気雨だー」

夜美が見上げながら呟く。強くはならなそうだったけど、敷地内にある休憩室っぽい建物の縁側っぽい場所に避難する。

「怒られたのかな？」

私が笑ってそう言うと、夜美が空を見上げながら言う。

「うーん、天気雨は狐の嫁入りって言うぐらいだから悪い答えじゃないと思うけどー」

どうだろう、夜美らしいポジティブ解釈な気もするけど。私は赤い布が敷かれた、縁側っぽいところに深めに腰掛ける。

夜美は、眼の前に立って庇の向こうを見ている。

私は、背中を向けている夜美の腰の辺りを掴まえて、膝と膝の間に座らせる。ふわふわの髪と、可愛らしい桜の香りに包まれる。

「おっと、びっくりしたー」

と言いつつも、いきなり倒れこんで私に負担をかけないように、上手いこと座り込んで来たので、ある程度予想していたのだと思われる。さすが夜美。

今日は私はジーパン。夜美は少し短めの春物スカートなので、縁側が深めなのもあって無理なく重なって座ることが出来ている。

私は手をそのまま前に回して、夜美を抱きしめつつ、可愛らしい桜の香りの中に顔を埋める。幾つかの花びらはその勢いでハラハラと縁側の上に落ちた。

天気雨の音の静けさの中で、少しの間寄り添った。

その後は、夜美の体に纏わり付いた花びらを一つ一つ取ってあげた。

夜美は座ってからずっと、手持ち無沙汰気に、手は縁側の上に置き、足は縁側の縁でブラブラさせていた。

最後の一つを取ってあげて、それを夜美に伝えようと、夜美は立ち上がってこつちを向いた。

「実は彩月の髪にも結構一杯付いているのでした」

そう言いながら、今度は夜美が私の髪についた花びらを取ってくれた。

最後の一つを撮り終わった辺りで、丁度天気雨は収まったようだ。

お狐さまが私達にくれた、気まぐれの時間は終了だ。

「帰ろう、彩月」

夜美がいつもの笑顔を向けながら、私の右手を両手で引っ張りあげる。

「うん、帰ろう」

今年の二人だけの花見は、これで終わり。来年もまた、この場所に二人で桜を観に来よう。

桜達に別れを告げて、オレンジ色に染まり始めた空を眺めながら、二人の影が繋がった姿を見つつ、家路を急いだ。

終

百合団地シリーズ（仮） Vol. 06
金の華〜前編〜

初夏、空から振る陽射しと、木々の緑は徐々にその濃さを増し、私達の日々を照らす。

私に寄り添い、オレンジの陽射しに透ける、金の華。

聞き慣れた、流れるような鈴の音と共に、春の訪れに、心躍らせる。この空間に満ちる、光の帯。ひととき奏で終えた、月乃さんの髪を、柔らかに揺らす。

いつもと変わらずに、馨るその髪に、私はそっと、手を触れる。

「なっ、なに」

月乃さんは驚いた様子で、話を途中で止め、私の手をそのままに、こちらを見る。

焦りの浮かぶ、その表情もまた、ここ最近で、見慣れた顔。

「月乃さんの髪は、綺麗ですよね。この時間の陽の光を浴びると、不思議な薄茶色になります」

月乃さんの髪をくるくると、陽に晒しながら、指と指の間を流し通す。月乃さんの香りが、仄かに増す。

私の手に伝わる感触は、ぬいぐるみのように、ふわふわしている。

「あ、ありがとう。お母さま譲りのこの色は私も大好きなの。でも、私は陽子の髪も大好きだよ。いつだって艶やかな、月蝕の色とシルクの手触り」

そう言いながら、先程からずっと触れたままの私の髪を、再び撫で梳かす。

「ありがとうございます。私も自分の髪はお母さま譲りでお気に入りです。それでも、月乃さんみたいな綺麗な色には憧れます。今度染めてみましょうか…」

もう片方の手で、自分の髪に触れてみる。

「ダメー陽子の髪はこの色じゃないとヤダー！」

そう言っ、月乃さんは私の髪を両手で、労るように包み込む。月

乃さんの両手の柔らかさが、嬉しい。

「ですが、月乃さんのような光に透ける色は、女の子なら誰でも憧れてしまうものですよ」

私も月乃さんと同じように、両手でその綿菓子のような感触を包み込んで、自分の頬に寄せてみる。

頬を撫でる、綿菓子のような感触と、花の香り。

「う、で、でも、私は陽子の髪の色はそのままが良いし、そりゃ、私の色を好きになってくれるのは嬉しいけど……」

月乃さんは、その頬の色を、更に朱色に染めながら、消え入るように呟く。

月乃さんらしいその様子に、私は思わず頬が緩む。

「解りました、では色は絶対に変えません。でも、そろそろ毛先が乱れてきたので、揃えて貰ったりとかしたいところですね」

私は月乃さんから手を離し、自分の髪の毛先に、指を絡ませる。ふわふわから、いつもの手触り。

「陽子はいつも、どこで髪を切って貰っているの？」

月乃さんは、少し残念そうな表情を浮かべながら聞いてくる。

「いつもは、と言うか生まれてからずっとですね。お母さんに切ってもらっています。ただ、長さは少し短くしたことがあるぐらいです。今回も少しだけ短くしてもらいましょうか……」

うちのお母さんは、生まれた時からずっと、私の髪を切ってくれている。

そう言えば、私の髪を扱う時のお母さんは、月乃さんと、よく似ているような気がする。

「そっか……じゃあ悪いかな……」

月乃さんのつぶやきが、耳に届く。

「どうしました？」

私はその先を促す。

月乃さんは私の髪から、手を離す。

「うん、私の知り合いの人がやっている美容院があるんだけど、そこに陽子を一度連れて行きたいなあと思って」

月乃さんは、そう言って再び頬を染める。その申し出は、少し意外だけれども、同時に心惹かれるものだった。

「そうなんですか、そのお店ってどこにあるんですか？」

私は惹かれた心に従って、問い掛ける。

「渋谷、女子高生の聖地の渋谷」

月乃さんは、微笑んで告げる。私は俄然、興味が湧いてくる。

「渋谷ですか……実は私行ったこと無いのですが、私達にとっては聖地だとは知らなかったです。行ってみたいです」

そう言つて、私も微笑み返す。

「じゃ、じゃあ行ってみる？今週末にでも」

月乃さんが、更に笑顔で言う

「はい、そうですね、そのお店で髪を切つて貰いたいかなと思います」

月乃さんは少しだけ表情を曇らせる。

「でも、陽子のお母さまに申し訳ないような……大丈夫？」

月乃さんは不安そうに、上目遣いで尋ねて来る。

なので、私は微笑みで返す。

「大丈夫です、お母さんなら多分喜んで送り出してくれる筈です」

月乃さんは満面の笑顔で、両手を振り上げながら答える。

「本当に？やった！じゃあ、今週末は二人でお出かけだね！」

先程よりも濃さを増した、オレンジ色の光の中で、嬉しそうにはしゃいでいる月乃さんを、見つめる。

今週末は、何よりも楽しい一日を月乃さんと過ごすことが出来そう
だ。

百合団地シリーズ（仮） Vol. 07
金の華〜後編〜

私の耳に届く、雨音の響き。

大気に溶け、土に眠る。

繰り返す音の波の中を、密やかに近付く、心地よいリズム。

既に聞き慣れた。

しかし、飽くことのない、愛しい音。

ひととき途絶えたその音は、やがて鈍る硬質な音色に変わり、微妙に隔てて止まる。

雨音のみの静寂は、今も止まない。

数瞬、硬質な電子音により、静寂は破られる。

「いらっしやい、月乃ちゃん。あらあら、今日もおめかしして、可愛らしいこと」

恐らくは、私が母と呼ぶ人の、嬉しそうな声。

不確かな意識の向こう側、泡と消える。

向こう側には、まだ戻れない。

「あはは、お邪魔します。お母様もいつも通り、素敵ですよ」

紡がれる、彼の鈴の音。

意識の虚ろ奥から、私を目覚めへと引き寄せる。

布団から起き上がり、その鈴の音に耳を澄ます。

「陽子はもう起きてますか？」

私の名前を呼ぶ、彼女の声は、何時も変わらずに、私を惹き付ける、甘さを含む。

「あの子ねえ、まだ寝ているのよね。多分今日の天気は、心地良いのかしらねえ」

母君の見立ては、とても正しく、私の心を的確に捉える。

「ああ、今日は雨音が響いて、心地良い天気ですもんね。陽子の好きそうな、程良く湿気を含んだ、良い大気です」

こちらにも正しく私を捉える、深みある我が理解者たる、私の良好な

る人。

天からの音色に重なり、遠く近く響く、その声色の中に、私が心を囚われた、何かが内包される。

「こんな日は、陽子と一緒に、水素の中を歩きたいですね」

その表情もまた、見えずして、しかしながら容易に私の脳裏に、呼び起こされる。

目覚めの時は近い。

共に歩く時間の為に、私は自らの意識を導いて行く。

「月乃さん、おはようございます」

そのまま流れに任せて、玄関に向けて顔だけ出したら、そこにはピンク色の天使が居たりした訳です。

「あ、陽子おはよ」

ひらひらと手を振る今日の陽子さんは、黄色のTシャツに、東のヒマラヤスギも誇らしく、青地のショートパンツも愛らしく、ピンクの上着を羽織り、赤のベレー帽を被ったその姿は、可愛らしくも元氣そのもので、月乃さんの魅力が余す所なく、現されている気がするのです。

対する私は、未だパジャマ代わりの緑のTシャツと、黒のショートパンツですが、同じ響きを持っていても、月乃さんのそれとは大きく差があったりして、少しだけ恥ずかしいような気もするのです。

「早く準備済ませちゃいなさいな。月乃ちゃんも取り敢えず上がって貰って、居間で待って貰えるかしら」

お母さんがテキパキと、寝ぼけた私の頭に指令を送り込んでくれるので、そのままお願いすることにした。

「うん、月乃さん、上がって待っていて下さい。準備しますので」

そう言って、私は顔を引っ込めて部屋のドアを静かに閉める。

「うん、分かった。待ってるね」

玄関で靴を脱ぐ音と、お母さんとの話し声を残して、月乃さんの足音は、居間の方へと消えて行った。

今日の月乃さんの可愛さに見合う様な、ちゃんとしたお出かけ姿を、月乃さんにお見せしなければいけない。

私はまだ少し寝惚けた頭を目覚めさせる為に、ドアを開けて洗面台に向かいながら、今日の余所行きの装いについて、考えを巡らし始めた。

雨の滴のリズムの中を、月乃さんと二人で歩く。

滴の舞う中を二人、駅までの道程を歩くのはとても嬉しい。

考え抜いた末に選んだ今日の装いは、白のワイシャツに、水色のTシャツと青のロールアップデニム、夏向けに買った宝石っぽい飾り石で彩つてあるミニチュール。

少しは今日の、可愛らしい装いの月乃さんに、釣り合えただろうか。

月乃さんは私の右隣を歩きながら、顎に右手の親指と人差し指を当てながら、神妙な顔付きで、何やらぶつぶつと呟いている。

「……やっぱり、格好良さの中に……可愛さを……」

雨雫が弾く、その傘の色も、今日の装いと同じピンク。

時折その金色の髪に踊る滴が、より一層その美しさを引き立てる。

「どうかしましたか？月乃さん」

月乃さんは顔を上げることもなく。

「うん、これからの方針についての検討をね、重ねていたところなのよ」

良く解らないけれども、月乃さんにとっては大事な事らしい。

何より真剣な横顔が、それを物語っている。

駅までのいつもの道のりも、月乃さんと歩くことで、普段とは違ったものになる。

月乃さんは、私の華だから。

駅前の歩道橋を歩いて、駅に辿り着く。

そう言えば、月乃さんと電車に乗るのも初めてのようない気がする。

「月乃さん、切符を買いましょう」

普段は二人共電車通学はしていないので、定期は持っていない。

「うん、渋谷までね」

渋谷への行き方は、月乃さんが知っている。

私は月乃さんに、ただ付いて行けば良い。

私達の住む百合の花咲く丘から、渋谷までは、電車を乗り継いで四

十分ぐらい。

切符を購入して、ホームで電車を待つ。

雨の滴が、足下を伸びて行く二筋の軌条に、跳ね上がり舞い散って行く。

水音に覆われた空間に、行き先を告げる声が響き渡る。

「そろそろ電車来るね」

その声に重ねながら、月乃さんが間もなく電車がやって来る方向に、視線を向ける。

私の視線の先に残るのは、帽子の赤色と、月乃さんの纏う、金の糸。視界の奥を占める、水素を含んだ微粒子の中に、静かに佇む。

暫くその後姿を見続けていると、不意に月乃さんがこちらを向く。

「陽子は、雨の日は好きだよね」

慌てたように直ぐに視線を戻すと、唐突に私にそんな疑問を投げかける。

「そうですね、雨の日は私は、結構好きですね」

雨の日には、今日のように、いつもと少し違う装いの、月乃さんを観ることが出来る。

それと同じように、滴の中で世界はいつもとは装いを少し変えて、その新たな魅力を、私に見せてくれる。

雨とは、魔法のようなものなのだ。

「私も、雨の日は結構好きだな」

そう言って、満を持したというような微笑みを浮かべて、私の方を改めて振り返った。

二筋の軌条を辿って来た電車に乗り、隣駅の新たな百合の丘の、駅を目指す。

「まずは急行に乗り換えね」

私達の住む駅には、急行は止まらない。

急行に乗るためには、隣の駅で乗り換える必要がある。

私達は、隣駅までの僅かな時間を過ごす為、電車に乗り込む。

一駅で着いた、新たな百合の丘。

私達の住む駅に比べると、大分大きくて、賑やかな駅。

「次はここだね」

今日は取り敢えず乗り換えだけなので、後日また、二人で訪れたいと思う。

新たな百合の丘で乗り換えた、電車の中。

次の乗り換えは、暫く後だ。

「陽子、次の乗り換えの駅で少し寄り道して行っても良いかな？」

月乃さんが、窓の外を流れる、緩やかに漂う街並みを眺めながら、咳くように言葉を発する。

次の駅は、そこそこ遠い。

普段行かない場所なので、何があるのか気になる。

「そこにはね、素敵な場所があるんだ」

次の駅の名前が、表示されている。

下北沢

下北沢駅に、月乃さんが望む場所があるらしい。

下北沢の駅の南口を出て、線路沿いに歩いて行くと、線路を渡る道と商店街の方の道に分かれる。

右に曲がる月乃さんの隣で続いて、右に曲がる。

少し進むと右手に特徴的な、劇場の建物が見えてくる。

「下北沢は演劇の街だからね。劇場も演劇関連のお店も沢山あるの」

そう言つて月乃さんが指差す先には、先程の劇場の前面に、『演劇の街』との垂れ幕が見える。

「演劇に関してはまた下北沢に来るとして、今日はもうちょっと先の方」

そう言いながら歩いて行く月乃さんの、ゆらゆらと揺れる金色の髪が、雨雫の中に揺れ動くのを見つめながら、半歩後ろを付いて行く。

特徴的な劇場を通り過ぎた先の十字路でも、角にやっぱり劇場があった。

そこを北へ通り抜けて、少し行った先で細い道に入り込む。

細い道を抜けると少し大きめの通りに出て、大きく曲がる道の付け根の辺りからまた細い道に入り込んだ。

そして直ぐに、その場所は見つかった。

普通のお家に見えるけれども、それは屋根に白の十字を掲げていて、お聖堂だと言うことが解る。

「教会ですね、やっぱり月乃さんは教会好きですね」

何となくの予感の中で、私の思いが月乃さんの思いに重なり合っていたのを、嬉しく思う。

「うん、連れて来たかったのはこの教会。でもね、この教会はこちら側よりも反対側がもっとおすすめのなの」

そう言うと、その普通のお家っぽいお聖堂の横の道に歩き出して行く月乃さん。

私は、そのまた半歩後ろを着いて行く。

舗装されていない、砂利道を歩いてお聖堂の裏側に回ろうとする辺りで、その白と水色を纏ったお姿が現れる。

「教会のね、奥の方にルルドがあるの」

月乃さんのその言葉を聞きながら、私達は教会の裏手に辿り着く。

そこは少し開けた場所で、振り返れば聖堂の外側と思われる特徴的な多角形の外壁と、その外壁の私達から正面の位置に、小さな青い扉の入り口があった。

そして、その入り口の上を飾る小さな屋根の上には、青銅色の十字架。

「この入り口は、私達は入らない方が良いけれどね。でも、こっちから見るお姿の方が私達のイメージする、教会らしさがあるでしょ？」

月乃さんのその言葉は、生来の透き通るような純粹さを感じさせる。

その言葉通り、その周囲を囲む木々の緑を従えて、位相した他空間との重なりの中で幻想を宿している様な姿。

「何だか、街中にある様な感じがしませんね。静かな森の奥で、思いも寄らず聖なる拠り所に足を踏み入れてしまった様な、そんな心のざわめきを感じます」

振り落ちる滴を従えて、仄かにけぶる水素の中で、それは静謐な無音の求めを訪れる者に訴え掛けて来る。

さながらそれは、祈りを持たずに訪れる者への無声の重力であり、

根源へと呼び起こされる畏怖でもある。

「マリア様も見てくれているし、聖堂に捧げられた祈りがこの場所に辿り着いて、この空間を漂い、満たしている様な気がするの」

月乃さんを覆う、淡紅色の花、水色の粒子をなびかせて、くるりくるりと跳ね回る。

月乃さんが惹かれるのは、人の心。

心もたらすもの、全て。

それは即ち光、光受ける者もまた、それはきつと光。

滴は月乃さんの為に、光の為に、その心にそれを見る者の心に、降り積もる。

ルルドへのお祈りを済ませた後、教会の正式な入り口に戻り、中へと足を踏み入れた。

そこは聖堂の手前にある玄関とも言える空間で、小さな祭壇の様な窓際の出津疎な感じの飾り付けが目についた。

その右側に聖堂への入り口があつて、反対側の入り口側の隅に籐で出来た籠が置いてあつた。

月乃さんはそこに近付いて行くと、中の物を二つ程手に取つて振り返つた。

「どうぞご自由にお取りください、だつて貰つとこうか」

そう言つて、手渡されたのは二色ある内の黄緑色で縁どられた聖画が描かれたしおり。

月乃さんの手元には、白く縁どられた聖画が残される。

「ありがとうございます、黄緑色が奇麗ですね」

月乃さんはちよつと嬉しそうに、含み笑いをしている。

「陽子は白が似合うよね。次お出掛けする時は私は黄緑色を着て来ようかな」

窓から差し込む雨空からの柔らかな光は、月乃さんを照らす喜びに震える。

聖堂の静寂の奥へ歩み出れば、そこに満ちる音は、ただひたすらに屋根を、窓を濡らす滴達の囁き。

目に留まるのは、空間に密度を与える主の居る先、そこは特徴的に

三角に縁どられている。

「さっきの青いドアは、正面の裏側にあたるね。裏から入って良いのは、ここをホームとする人だけ」

しずしずと、その奥へと向かう月乃さんの後ろ、いつもの半歩の距離がその纏う白さを保つ長さ。

二人で捧げる祈りを、共に同じ場所に連れ立って行ってくれるのは、場に満ちる無音の響きを統べるもの。

祭壇の手前に立ち、帽子を脱いだ月乃さんは、その金色の糸を漂わせながら、その祈りを主に向ける。

そして私もまた、その姿を目に留めた後、共に同じ向き先に、想いを向ける。

私に、この人の見るものと、同じ景色を見させて下さい。

窓の外は、都会の景色を高速に送り出しながら、私達をその街を指して運んで行く。

「さて、後は渋谷で降りるだけ」

下北沢の駅を出て、乗り換えた電車は渋谷を目指す。

隣に座る月乃さんの、楽し気に窓の外に投げられた視線は、その景色の変化を楽しんでいる様で。

同じ景色を見つめる私の視線の隅に揺れるのは、月乃さんの周囲で楽し気にふわふわと揺れている、金の糸。

その跳ねに合わせる様に、私の心持ちもまた時折跳ねる。

雨は小雨のまま、景色を透過する程には、静かに窓の外を流れる。

「雨の日の、電車の窓から見える景色って良いよね」

横顔のまま、月乃さんが呟く。

「そうですね、少しトーンを下げた街並みが、一瞬で通り過ぎ去って行くのが、少しの寂しさを心に残すからでしょうか」

二人横顔を揃えたまま、窓の外で、灰色の靄の中に溶ける街並みを見続けている内に、そこそこに都会な、オフィスビルの重なる東京の中でも、更に都会っぽい街並みが現れだした頃、次に辿り着く駅として表示されていたその街に、電車は辿り着いた。

渋谷

渋谷駅のホームから、出口の方に向かう月乃さんの半歩後ろをくつつく様にして歩く。

「陽子、私の方を見てはぐれない様にしてね。今向かっている出口にはね、あの有名なハチ公が居るよ」

ハチ公の話は知っているけれども、私の頭の中では海外の俳優さんが、ハチ公の事を呼んでいる映像が浮かんでいた。

「ハチ公が飼い主を待っていた駅がそう言えば渋谷でしたね。映画ではどこの駅だったかは知らないですけども」

月乃さんは物凄い数の人の間を、ふわりふわりと自然に浮かぶ様に擦り抜けて行く。

月乃さんの後ろにくつついていく限りは、私も人の波に飲まれる事は無さそう。

「映画は私も知らないなあ。アメリカじゃないかな?」

どうも月乃さんも、昔もつと小さな頃に聞いたものでは無く、私と同じものを思い浮かべていたようだ。

そのハチ公の名前の書かれた出口の改札を抜けると、駅前らしい少し開けた場所に出た。

「あっちに行くとハチ公が居るよ、行ってみようか」

月乃さんはそう言うのと広場を抜けて、交差点のより前で左を向く。

そこにはハチ公よりも先に目に付く、緑色のカエルっぽい感じの顔をした電車が置かれていた。

「ああ、それはね『青ガエル』って呼ばれている古い電車だよ。待ち合わせに使えるよね。で、その前にハチ公は居るの」

気配で察してくれたのか、電車の方の説明も月乃さんがしてくれた。

こちらも気配で伝わったみたいで、その説明に頷きを返しつつ、月乃さんはその反対側に視線を向けた。

そしてそこにこそ、件のハチは待っていた。

その金属質のハチの周りは、これもまた休憩出来る風に円形の小さな空間になっていて、ハチを眺めながら待てると言う、お得な居心地を感じさせた。

「ハチって秋田犬何だって、可愛いよね」

月乃さんは、傘をハチにさしかける様にしながらにこにこ笑っている。

月乃さんは、犬も好きなのだ。

「さて、良くテレビとかでも出て来るスクランブル交差点を通って、あの本屋の脇の道を行います」

先程から直ぐ傍に有った交差点が、渋谷でも結構有名な、所謂スクランブル交差点だったらしい。

またほわほわと、ちよつと前に青信号となったそのスクランブル交差点に歩き出した、月乃さんの金色の糸に覆われた小さな背中を見つめながら追い掛ける。

本屋の脇の道は、入り口の所に『渋谷センター街』と書いてあるのが分かった。

「この道が良く聞く『渋谷センター街』色々な事で有名」

『渋谷センター街』、色々な事で有名な事でも私にはあまり良く解らない。

歩いていると、両脇の街灯に長崎県の佐世保の文字が目についた。

「渋谷と佐世保は良く色んな事でコラボしてるねえ。その内長崎県とか佐世保とかも陽子と行ってみたいね」

街灯に視線を向けていた私に、月乃さんが説明してくれる。

月乃さん的には、私と二人きりで旅行するのも抵抗が無いみたいで、良かったと同時に少し心躍る自分が、胸の内にも有るのを感じる。

月乃さんの言葉一つで、私の中の心の私に暖かな光が落ちる。

道が突き当たって、左右に分かれた辺りで右に曲がって、ジグザグな感じで更に細い道を歩いて行く。

「この細い道はね、その電信柱にも書いてある通り『春の小川』が暗渠になった道なんだよ」

『春の小川』は多分歌の春の小川の事なので、それは私にも解った。

「月乃さんは、渋谷の事を何でも知っているんですね」

その金色の背中に向けた、感心は心からの本音。

「うん、日本の女子高生らしく渋谷には出来る限り来るようにしてた

し色々調べていたから」

月乃さんは既に、立派な日本の女子高生になられていると思う。

「今日向かっている美容院はこの道沿いにあるの。ほら、あの茶色いビルの二階」

そう言つて月乃さんが指差した先には、私達の右手に現れた、普通のオフィスビルっぽい感じながら茶色く可愛い感じになっている小さなビル。

その入り口の、ガラスの扉を開けて二人中に入ると、目の前にあるのは少し急な階段で、二人繋がる様にして上る。

二階の踊り場に立った右手には、黒いドアとELEVÉNと書かれた、黒と白二色のこのお店のらしきロゴマークが貼ってあった。

月乃さんはそのドアを勢い良く開けると、お店の中に進んで行く。

私はその導きに従うままに、その後ろを着いて行く。

「どうもー玲さん、来ました」

そして月乃さんは、お店の人に親しげに声を掛けた。

「いらつしやい、ああその子が例の子ね？」

「いらつしやい、月乃ちゃん」

その月乃さんが声を掛けた方と、他の店員さん全員が一斉に月乃さんの方に顔を向けて挨拶の言葉を発する。

月乃さんはやはりと言うか、当然の如く皆様とお知り合ひみたい。

その玲さんと言う方は、短くもさらさらした髪と、黒い上と白い下のパンツスタイルで、男性的な格好良さと強さを感じさせた。

「そうです、例の私の大事な陽子です」

そう言うなり、振り返つて私の両肩に両手を置くと、私をそのまま自分の前に持つて来た。

月乃さんの言いつぶりだと、普段からここで私の事を話しているのかな。

「初めまして、月島陽子です。いつも月乃さんがお世話になってます。月乃さんにはいつもお世話になってます」

そう言つて頭を下げると、月乃さんの小さな笑い声が聞こえた。

「むしろ、お世話になつてるのは私よね」

私が頭を上げると、そう呟いた月乃さんは、はにかんだ様に花を咲かせた。

しばしの静寂の時、私の髪を整えて貰う時間が始まる。

先程月乃さんが幾つかのお願いをしていたみたいだけれども、基本的には玲さんへとお任せになる。

玲さんが手に持った刃が、しなやかに私の髪を滑る。

入り口の方の椅子に座ったり、周辺に置かれている小物を眺めたり、本を捲ったり他の店員さんと話している月乃さんが見える。

反転した普段とは違うその姿は、いつもとまた何か違って新鮮なものとして、私の視界の中心を埋める。

「陽子ちゃん、あんまり顔は動かさないでくれた方が嬉しいかな」

視界の隅に映り込む、玲さんが困った様な表情を浮かべて私の方を見ていた。

「すみません、留めます」

そう返答して、直ぐに視界の中心を目の前に映し出された別世界の真ん中に置く。

月乃さんの姿は、視界の端から端を行ったり来たりする様になる。

「ありがとう、まあ気持ちは良く解るけどね。奇麗だからねえ、月乃ちゃんの髪は」

玲さんが、視界の隅の位置を左右に変えながら呟く。

「はい、いつも月乃さんの髪は素敵です」

私の視界の隅から隅の方へと、月乃さんの金色の華が、柔らかに揺れ動いている。

「良いね、陽子ちゃんのそう言う正直な所。陽子ちゃんが気に入る訳だねえ」

玲さんがそう言ったタイミングで、月乃さんがこちらを振り返ったと思うと、金色の野の中で、その顔が暖かな花を咲かせた。

そんな玲さん演出による、主演月乃さんの心地よい時間も、終わりを告げる。

「はい、終わったよ。さらさらつやつやお姫様カット」

鏡面世界の向こう側に見える私の姿は、先程までと大分印象が変

わって、強いて言うなら国語の子分の教科書に載っている平安時代ぐ
らいの物語に出て来る女の子達を思わせる髪形。

「私に似合っているでしょうか、いつもの自分と大分雰囲気が変わっ
てしまった自覚はあるのですが」

自分の頬の横辺りの風通しが良くなった感じが、今までの自分との
大きな違いを教えてください。

「何言っているの、私はその人に似合う髪形にしかしないよ。今回は
特に自信あり、ほら月乃ちゃんに見せて来てごらん」

そう言つて、玲さんは背中を押して月乃さんの方に促してくれる。

月乃さんは壁に据え付けられた本棚の方を向いていて、こちらには
まだ気付いていないみたい。

「月乃さん、終わりました。どうでしょうか」

長さは余り変わらなかった、自分の黒髪の穂先に指を這わせなが
ら、そこに自分の心の高鳴りを感じながら、月乃さんの横に立って、声
を掛けた。

「あ、陽子ほらこれ凄く古い型のタイプライターみたい。素敵でし
……」

こちらに顔を向けた月乃さんは、私の方を向いたまま、そのまま暫
し固まってしまった。

月乃さんの思っていた通りにはなれなかったかな。

「……プリンセス。私のお姫様」

その言葉の意味を考えてみるに、気に行つて貰えたようだけれど
も、私も言っておかないと。

「いいえ、それは月乃さんの事です」

そうすると、月乃さんの白磁を思わせる肌は、薄紅色に染まり、そ
の表情は私の心にも艶やかに花を咲かせてくれた。

「じゃあね、二人ともまた来てね」

そう言つて玲さんは、入り口のドアの外まで私達を見送つてくれ
る。

「玲さん、陽子をもつと素敵にしてくれてありがとう」

満面の笑みで答える、月乃さん。

「ありがとうございます、玲さん。月乃さんのお気に召した様で嬉しいです」

これからは、ずっとここで月乃さんと一緒に玲さんに整えて貰えたら嬉しい。

「良いね、二人とも。二人の髪、わたしがずっとやってあげるよ」

玲さんの方でも、そんな風に思っていてくれることが嬉しかった。

玲さんのお店を離れて、二人春の小川の上を歩く。

流れる水の音は聞こえずに、二人の間には沈み込む様に滴の響きだけが鳴り止まない。

そのまま沈黙の中で、二人の心は共に歩く。

一足ごとに、その重みを増しながら。

重なり合う時間の中、その重さを共に分かち合う瞬間を、私は私の中に大切に留めておきたい。

春の小川の上を離れて、何処かへと誘おうとしてくれているであろう月乃さんの半歩後ろを、静かな喜びの中で歩き続ける。

滴の響きは、止まない。

人の営みを、少しだけ遠くに見ながら大きな建物の集まる住宅街の中を、縫う様に二人、暫し長い道程を進んで行くと、恐らくその建物は住宅街の中にそのままの存在感を持って、私達の前に現れた。

「ここ、この美術館に今日は一緒に来たかったの」

その月乃さんが言う美術館は、周囲の住宅に巧みに溶け込みながらも、ひと所としての強さを私達に感じさせる。

道路とその美術館との石造りの境を回り込んで、こちらもまた石造りの壁に囲まれた入り口を入ると、月乃さんがチケットを二人分購入し、私に手渡してくれる。

「お幾らでしょうか」

そう言うと、月乃さんは微笑んで歩き出す。

「良いの良いの、今日は陽子を私が誘ったんだから気にしないで」

その金の華咲く背中の中の心強さに、私はそれ以上の事は話さずに、ただ一つ告げる。

「ありがとうございます」

その言葉に振り返った月乃さんの微笑みに合わせて、金の華はふわふわと静謐な空気の中に舞った。

展示は私でも知っている北欧の有名な陶磁器のブランドの展示で、私達が持つ北欧のイメージをそのまま白いキャンバスに溶かし込んだ様な淡い色の装飾がどれも見事だった。

「私はうさぎが二匹寄り添い合っている花瓶が良かったかな」

二階にあるサロンで、二人お茶とケーキを楽しんでいると、月乃さんが今日の展示の印象を呟き始める。

この美術館では、サロンでも展示を楽しみながら、お茶とケーキを楽しめる。

私は、ウサギの花瓶の事を頭の中で振り返りながら、他の沢山あった可愛らしい動物モチーフの食器を幾つか思い浮かべた。

「私はクリスマスローズがあしらわれた壺が気になりました。やっぱり動物モチーフとお花モチーフが可愛らしくて好きですね」

それらは何時でも、月乃さんの印象と重なるから。

「うんうん、動物とお花みんな可愛かったよね。将来自分でお金稼いで暮らす様になったらああいうの揃えたいね。今回のみたいのだと、ちよつとお高いかも知れないけど」

月乃さんは周囲に花を咲かせながら、その頭の中の動物や花達を愛おしそうに遠くに眺めている。

「楽しみです、一緒に見に行けると嬉しいです」

私がそう言うと、月乃さんはその花を咲かせた頬を淡紅色に染めて、まるでそれは先程見て来た花瓶に描かれた淡紅色の一凜の花を思わせた。

「……ああ、もうこの子は……自然体過ぎて……」

顔を伏せ、頬に両手を当てながら、月乃さんは小さくそう呟いていた。

お茶の後、館内を見て回りながら、窓の外を眺めていた月乃さんが言った。

「クリスマスローズが綺麗な所もあるから、今度また一緒に行ってみ

ようか」

その小さな手と、頬を再び薄紅色に染めながら。

「はい、楽しみです。凄いですね、真ん中に噴水があつてその上を渡り廊下が渡つていて、天井は吹き抜けて今日の曇り空から降る雨を噴水の周りの池で受け止めている。ここは建物としても素敵ですね」

そう言いながら、月乃さんに重なる様にして横から窓の外を眺めた。

その位置までくれば、普段も今日もほんのりと感じられていた、月乃さんのいつもの香りがより鮮やかに、私の感覚に届いた。

月乃さんは、見惚れているのか、窓の外の噴水と池を何も言わずに見下ろしていた。

その頬を、より鮮やかに紅色に染めながら。

私はただ、その月乃さんのいつもの香りの中で、大人しく暫くの間、間近で月乃さんを感じ続けた。

美術館を出ると、空から落ちる滴の音が、僅かに高さを増して、傘の表面を絶える事無く滑り下りて行く。

少し歩けば、見えてくるのは住宅街の中に現れる、緑の幅広く覆う一つの公園。

「この中、寄つて行くかうか」

そう言つて私に、ついて来ることを促す月乃さん。

その公園は、真ん中に大きな池があつて、その周囲を囲む様に、遊歩道を歩く事が出来る様になっていた。

「一周して美術館の方に戻つて、来た道を辿つて渋谷駅の方に戻つて、もう一つ寄りたいお店があるからそこに寄つてから帰ろうか」

そんな提案をしながら、月乃さんは遊歩道をゆっくり進んで行く。

この空間に満ちる、水素の粒子たちの全てが、月乃さんのその金の糸たちを潤して行く。

目の前には水車を伴つた、小さな小屋が見えて来る。

規則正しく回る水車の音を聞きながら、その袂に立ち、池の中央にある小さな島の木々に私達の頭上と同じ滴が、絶える事無く降り積もり続ける姿を、二人暫くの間眺めていた。

「あ、小鳥」

小さな島の木々の上に、雨宿りする小鳥の姿が見えた。

二人の間に音は無く、また言葉は一人にとって、いま必要は無く、その小さな小鳥が時折滴に打たれる姿を、また眺め続けた。

私の隣で、微かな風に乗り、細やかに揺れ動く月乃さんの金の糸。

その向こう側に見え隠れする、その透き通る様に白い頬に、自然と顔が向いた。

私はきつと、だからそこにまた、花を咲かせたくなったのだ。

「へっ……」

淡紅色に染まる月乃さんの、その指先の温度と高鳴りを感じながら、その金の華を見つめた。

ただただ、月乃さんは何も言わずにじつと自らの足元の、滴の跳ね音の向こう側を見つめていた。

私の手に伝わってくるのは、その淡紅色の確かな温度と、微かに早まり続ける月乃さんの振動のみ。

それだけが、私にはただ充分過ぎるぐらいの、暖かさを教えてくれた。

小鳥はそうしている内にいつの間にか、私達に小さな鳴き声だけを残り、もう枝の奥の見えない所に行ってしまった。

公園を抜けて、美術館の前を通り過ぎて、来た道を逆に辿る。

「本当は行きと帰りは別な道を歩きたい派なんだけどね。今日は道に迷うのは困るから来た道に戻るね」

そう言いながら、何処か嬉しそうに、鼻歌を歌うかの様に月乃さんは私の少し前をまた歩き続ける。

「はい、私も行きと帰りで別な道を歩きたい派ですが、今日はちゃんと道に迷わない様にして、また来た時に色々歩き回りたいですね」

そう伝えると、向こう側で月乃さんはまた花を咲かせた様だった。それは、背中の金の華の揺れ具合や、その向こうに見える、透き通るような頬の動きの変化で、きつと感じられるのだと思う。

そうして駅の方に戻って来て、元々来たのとは違う、更にその向こう側の大通りへ抜けて、暫くその大通りを歩いた後、右側の小さな通

りへ曲がった。

その道路は、特徴的な赤色に塗られていて、両端は石畳っぽい感じになっていた。

柔らかにオレンジを含んだ陽射しが、私達を照らし、その赤色の道路にも照り返している。

「ここら辺の道路は、夜に私達が歩くのは少し危ないけど、今ぐらいの時間なら取り合えず大丈夫。まあ、何か危ない事があっても、私が陽子を守るけれどね」

任せて、と言う感じにその小柄な体で胸を張る月乃さんは、上級生らしい格好良さと、その小さな体に良く似合う、可愛い仕草が相まって、暖かな愛おしさが、私の中を満たした。

「はい、危ない時には、月乃さんに助けて貰います」

そう答えると、月乃さんははにかんだ様にこちらを振り返った。

突き当りのコンビニの辺りで、赤い道路は終わって、そこから左右の道路は石畳のみに変わる。

月乃さんは私の歩を促す様に、左の道を先立って歩く。

更に左と真っ直ぐに解れた道を、月乃さんは真っ直ぐに進んで行く。

「あ、あれあれあの看板のあるお店」

程無くして、緑地に黄色い文字の四文字の看板が見えていた。

看板の下に立つと、その建物は少し古い感じの、所謂モダンな作りと言う風な建物である事が分かった。

「陽子、ここから先は一つ注意があります」

月乃さんが私の方に向き直って、とても真面目そうな感じで、大仰にそんな口上を述べられる。

「はい、何でしょう」

私もつられてみて、一緒に畏まった雰囲気醸し出しながら月乃さんの言葉に、注意深く耳を傾けた。

「お店の中に入ったら、一言も話してはいけません。何か話したい事があっても筆談でお願いすることになります。陽子の事だから大丈夫だと思うけど、それだけはしっかりと守らないといけません」

月乃さんは妙に格式ばった、学校の先生やシスターの様な態度で子供に言い聞かせるかの様に話すので、それが妙に愛らしさを感じさせる。

「分かりました。もし喋ってしまったら、月乃さんのお仕置きをお願いします」

だから、多少そんな様な事を言ってしまったりもする。

「ええっと、はい分かりました。でもなあ、陽子の事だからお仕置きされるのは私の様な気がする」

そう言ってお店のドアに向き戻った月乃さんの耳と頬は、ほんのりと淡紅色に染まっている様に見えた。

月乃さんは、こう言う時に意外と上級生の意地みたいなものを見せてくれたりもする。

そして、月乃さんは静かにドアを開け、私を共連れて、その薄暗い感じのするお店の中に足を踏み入れた。

滴の音が消えて行く、空間に満たされるのは過去の名曲の旋律。

大きなスピーカーが、お店の壁の一つの面を埋めている。

それは、まるで生きているかの様であり、その鼓動によって私達を威圧し、畏怖させる確かな重みと、強さを感じさせる。

自然と出された月乃さんの小さな手が、私の手を優しく取り、二階へと私を促してくれる。

少し薄暗い店内では、月乃さんを染める色を判別することは出来なかったけど、伝わる月乃さんの体温が、それを伝えてくれている様な気がした。

二階に上がると、スピーカーの方の一角が吹き抜けになっていて、その横に配置された座席に、二人繋いだ手をそのままに、隣合って座った。

そのスピーカーの、そうとは思えない壮麗な姿と、お店の内装が相まって、さながら私達の学校のいつもの聖堂を思わせる、神々しさを私達に感じさせる。

荘厳な旋律をBGMに、二人の間にただ幸福な無言の時だけが流れる。

伝わるのは、少しずつ、微かにその暖かさを増して行く月乃さんの手の小ささと、柔らかさだけ。

だから、ただ自然と、私はそうした。

「ふあっ……」

月乃さんの、瞳の閉じられた透き通る様に透明な、淡紅色に染められた頬が、窓から僅かに差し込み始めたオレンジの光に照らされて、私が大好きな先輩は、何て美しいのだろうと、ただただその姿を見つめ続けた。

今日一番の、月乃さんの体温を、永遠と名付けてもきつとおかしくない時間の中で、私はひたすらに感じ続けた。

滴の音は、もう、一滴も残らず、その音を止め、聖堂は沈黙した。

日が暮れ始めた、いつもの街の通りを、月乃さんと二人横並びで歩く。

繋がった手は、離れる事無く、故に二人同じ歩幅を保つ。

「ねえ陽子、また行くこうね渋谷」

月乃さんは、前を向いたまま横顔で微笑みと期待のまなざしを、私に告げる。

だから、私はいつも通りに違える事無く答える。

「はい、また二人で、一緒に行きましょう」

夜の入り口の、薄暗いいつもの通りも、月乃さんと一緒なら、何も怖いものは無い。